

◎クラシック巡礼 13

ワーグナー 『ワルキューレ』

2024年12月16日

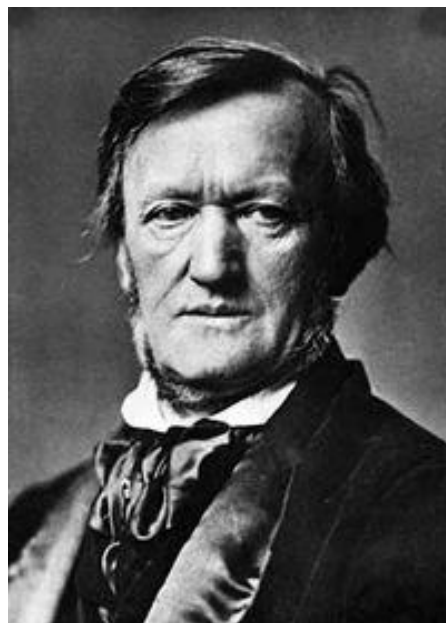
別当 勉

<betobetoven@mail2.accsnet.ne.jp>

プロローグ

壮大な叙事詩オペラである。ワーグナーの真骨頂が秀でた。この稀有の超大作『ニーベルングの指輪』のオペラ化を夢見て、彼の芸術すべてが収束された。歌劇『タンホイザー』も歌劇『ローエングリン』もこの楽劇のための発展段階であったと言っても過言ではないであろう。

とにかく、ゲルマン（現ドイツ）や北欧の伝説を調べ尽くして、それまで、特になかったドイツ神話を形成したかった。つまり、干からびた神聖ローマ帝国にとって代わるべき国体観を造形する情熱に燃えたのだ。この時期、遅蒔きながらゲルマンの世相も、まさに北部に逼塞しながらも跋扈してきたプロイセン王国を中心としてドイツ語圏の諸国をドイツ帝国に束ねるという明解なビジョンが沸き起こってきた。その堅固な意志を抱いた宰相ビスマルクが立ち上がって幾十とばらまかれてきたドイツ系小国を制覇してドイツ帝国に連合し、まとめ上げたのだ。よくよくみれば、ドイツ古来の神の国伝説が薄いではないか。国家も成り上がると当然にそれを欲しがる。期せずして、『ニーベルングの指輪』はドイツ帝国の人々の心に垂涎の的として祭り上げられた。



http://pietro.music.coocan.jp/storia/wagner_vita.html

日本には、古くから古事記、日本書紀があつて天皇という国体が延々と中心に存在してきたから、極めてスムーズに神の国の富国強兵が推進できたのである。ただし、ロマンが欲しかった。つまり、卑弥呼の治世と歴史であるが、さすがに欲張りとなろうか。歴史は文字の無い時代については語り得ないのだ。仕方ない。

そういった古代への情熱に憧れながら、ワーグナーの気概は、それを遥かに超えて芸術を志向した。まず、楽劇という形態である。従来のオペラに拘泥することなく、それを半ば無視して、アリア、レシタティーフ、合唱、バレエ、オーケストラなどのオペラ要素にアイロンをかけて古臭い皺を伸ばし、歌唱と管弦楽に絞り込んで透析した。

次に、もとより作曲家単独で、台本も曲も作り上げることにした。このため、脚本家や台本作家との無意味な論争が産まれる余地がなくなった。今でいえば、創作インテグレーション（統合）となろう。ただし、手間は半端じゃない。かなりの文学的素養は勿論のこと、歴史学への造詣も必須となる。ワーグナーはそれらを事もなげにやってのけた。彼の才能は他の音楽家に比して桁違いであったのだ。我が国では、黒澤明監督がその代表となろうか。

加えて、北欧神話、ゲルマン伝説などを題材にしたことから、論争相手が少なくなって、ワーグナーの独壇場で物語と楽曲を綿密に作り上げることができた。強いて言えば、無理して挑みかかってきたのはニーチェぐらいであったが、楽劇創作のエネルギーとなる知見の広さと厚身から相手にならず、ニーチェも己のみすばらしさを繕うので精一杯の様子だったようだ。ワーグナーは哲学という概念化合物に反応する嗜好はなかったのかもしれない。彼は「創作」一途の男だったのだ。最高のエンターテインメントは創るべきとの観念に終始一貫した。

こんなバケモノみたいな音楽芸術家ワーグナーを語ろうとした私も愚かであろうか。

彼の生誕1813年は、ショパンやシューマンの1810年、やがて無二の親友となるリストは1811年であったから、大変な楽才たちが百花繚乱のように咲き誇った時代である。反ワーグナーとしてドイツ楽界で祭り上げられたブラームスは、けっこう離れて1833年に生を受けたが、本人同士は作品への嗜好の違いも大きく、双方のファンに敵愾心を煽られて多少とも迷惑だったようである。

世は、革命も冒険も新聞が間に合わないほど、特に、帆船を操って荒波を超えて命知らずの冒険者や探検家たちが世界中を駆け巡った時代であり、東洋の島国も揺さぶられたことは、我々の記憶に深く刻まれた。

そんな時代に、ワーグナーは神話に没頭して、脂が乗り切った壮年の25年間もかけて超大作『ニーベルングの指輪』を仕上げた。四日四晩の上演になるから、私は、当然ながら次に掲げるその楽劇の構成において、2番目の『ワルキューレ』を選択して集中した。

楽劇 『ニーベルングの指環』(1849～1874 完成)

序夜 : 『ラインの黄金』 (上演: 約3時間)

第1日: 『ワルキューレ』 (上演: 約4時間)

第2日: 『ジークフリート』 (上演: 約4時間)

第3日: 『神々の黄昏』 (上演: 約5時間)

『ワルキューレ』は、この楽劇全体の急所でもあり、ここだけでも深入りすれば、全体の理解に行き届くとみた。

しかし、この楽劇の上演のために彼は、特注で『バイロイト祝祭劇場』を建設したのだから、彼の想いの廣大さと、それに反比例した綿密さに目が回る。大法螺吹きに似非天才なら、このような計画の実行結果は、まさに落花生のごとく中抜けに終始したかもしれない。

これまでの世間の評価は、何にしても作品の極上の出来上がりに驚嘆してきている。

私も、超大作のオーラ・プレッシャーを感じながら、この巡礼のために語る以上の知見を積み上げてきたつもりであるから、諸賢の賞味に堪えうるものと念じている。

ワーグナーの生涯

ワーグナーは、音楽史ではロマン派の音楽家であり、芸術指向の歌劇に特化した作曲家でもあった。しかしながら、彼は伝統的な交響曲やピアノソナタなどの純粋音楽には嗜好を示さなかったが、何故か、ベートーヴェンの第九交響曲に死ぬほど熱狂しながら、ドラマだらけの歌劇に全身全霊を打ち込んで、楽劇という新しいジャンルを編み出した。すなわち、楽聖ベートーヴェンだけは19世紀の革命児ワーグナーに深く影響し、使喚したのだ。逆にみれば、楽聖の音楽には時代を突き抜けた『永遠の美』が埋め込まれているのであろう。それが彼には見えたのである。このことは、ワーグナーに心酔し、交響曲曼荼羅を描いたブルックナーにも通じる。

生立ち [1813-1830]

ワーグナー（ウィルヘルム・リヒャルト・ワーグナー）の祖父の時代に地方からライプツヒヒに出て来た。父フリードリヒは警察関係の書記をしていた。母ヨハンナ・ロジーナはパン職人の娘だったライプツヒヒはメンデルスゾーンが活躍し、今も世界最古の歴史をもつゲヴァントハウス管弦楽団や、J.S. バッハがカントルとして活躍した聖トーマス教会が現存する。

リヒャルト・ワーグナーは、第9子として生まれ、聖トーマス教会で洗礼を受けた。ワーグナー一家は、歌手兼演出家の兄アルベルト、ライプツヒヒの劇場と契約する女優の2人の姉と、歌手の1人の姉など、音楽と演劇に囲まれていた

21歳、ライプツヒヒでベルリーニ（1801-35）のオペラ「カプレッティ家とモンテッキ家」（別名「ロミオとジュリエット」）を観て大きな刺激を受けた。

興味

9歳の少年ワーグナーはウェーバーがドレスデンにおける初演となるオペラ「魔弾の射手」の虜になった。ウェーバー自身の指揮であった。この初演女流歌手デフリースの歌唱力と演技力に感服したという。

文学と音楽との興味を示していた16歳のワーグナーは、文学はもっぱら**ホフマン（1776-1822）**のような神秘主義に傾倒し、彼の生涯にわたって支配する傾向となる。この時初めて音楽を本格的に学ぶこととなる。2曲のピアノ・ソナタと弦楽四重奏曲を書き上げた。

17歳なった時に聖トーマス教会付属学校に転入学した。

そして、**ベートーヴェンの「第九」**の虜になって総譜（現在発行譜：67頁）を写譜し、ピアノ編曲まで行う熱の入れようであった。ちなみに、リストはベートーヴェンの交響曲全9曲をピアノ譜に書き替えた。

学習

18歳 [1831年]の時、ワーグナーは、ライプツヒヒ大学で音楽を学ぶために入る。

夏の終わり頃、聖トーマス教会カントルを務めていた

ヴァインリッヒ Weinlig（1780-1842）

に出会った。彼はオルガニスト、作曲家であった。著書に「フーガの理論書・実践的手引き」(1845年刊)もある。

この優れた師は彼の音楽への目を初めて開いた。彼の教え方は、実際の作品の分析から始まった。これは弟子の判断力を養うことにあった。多くはモーツァルトの作品で徹底的な分析をした。その後作曲指導が続く。彼は弟子が書いた曲に注意深く目を通し、誤りを指摘するだけでなく、その書き直す理由を丁寧に教えた。

先ず和声学を徹底的に実習させた。これを習得するまで対位法に進ませなかった。そして集中的に対位法を学んだ。ワーグナーの優れた二重フーガを目の当たりにして、彼は教えることを打ち切ったという。ヴァインリッヒの考えが、すべての応用はフーガにあると考えていたからである。

後に示される複数の示導動機(ライトモチーフ)を同時に呈示するやり方はこの時の成果であろう。約半年の短期教育ではあったが、その成果として「ピアノ・ソナタ変ロ長調 Op. 1」を完成し、師に献呈した。

示導動機 Leitmotiv…オペラ(楽劇)や標題音楽などにおいて、ある観念、人物、感情、事物を規定する動機=旋律、リズム、和声。最も典型的に用いたのは「ニーベルングの指輪」においてである。ベルリオーズは「幻想交響曲」で**固定楽想 idée fixe**を用いたが、これは示導動機と同じとも言えるものであった。21世紀の視点で捉えると、示導動機は作曲技法の一つと言ってよいだろう。これによって標題音楽が形成された。

19歳になると 処女作品「ピアノ・ソナタ変ロ長調 Op. 1、WWV21」が師ヴァインリッヒの推薦でブライトコップ社から出版された。 初夏に6週間で作曲された「交響曲第1番ハ長調 WWV29」は、ワーグナーに大きな自信を与えたようである。

20歳で、 長兄アルベルトから合唱指揮者としてヴェルツブルク劇場に招かれ、ヴェルツブルクに行くことになった。これによって彼は音楽家としての第1歩を踏み出したことになった。

ワーグナーの仕事は、ヴェルツブルク劇場の出し物の合唱指揮であった。ベートーヴェン、ウェーバー、ケルビーニ、オーベール、ロッシニ、マイヤベーアなどの作品が取り上げられていた。ここでオペラ作りの実際面を習得していくのである。

1834年 ワーグナーの第1作目オペラ「妖精」はこうした中、台本・作曲共に1年足らずで仕上げた。

エレガンテ・ツァイトウングに最初の論文「ドイツのオペラ」を発表する機会が与えられた。その中でイタリア人のオペラを誉め、ドイツ人のオペラは直接的に訴える力がないと批判している。

楽友たち

パリ・オペラ座への自作の売り込みも失敗に終わる。これを契機にフランスに対して悪印象を抱くようになった。それでも、ベルリオーズの「劇的交響曲〈ロメオとジュリエット〉」に感銘を受け、ベルリオーズを訪問。1841年（28歳）、ベルリオーズの「**幻想交響曲**」を聴き、強烈な衝撃を受けた。

リヒャルト・ワーグナー： わが生涯 より

今度は、新たにロンドンで友達になったベルリオーズを訪ね、真の友情を感じたものだ。彼には、気晴らしのためにほんのちょっとパリに立ち寄っただけだと話してある。当時の彼は、大がかりなオペラ『トロイ人』の作曲完成に忙しかった。この作品から何らかの印象を得るべく、まずは彼自身の手になる詩に親しむことこそ肝要であろう。一夜を費やして、私一人のために、彼はそれを朗読してくれた。

この際、詩自体の構想と、そしてまた、舞台効果をねらって妙にそっけなくとり澄ました彼の朗読の調子とが、私の気分を著しく損ねたものだ。終わりの方では、彼が自作テキストに作曲しようとした音楽の性格もわかるような気がしたが、私は全く気が滅入ってしまった。当のベルリオーズときたら、これこそ己が傑作と見なし、その上演達成こそは生涯きっての目的なりと考えているらしいからである。

1863年1月1日 ワーグナーは第2回ウィーン演奏会を開いた。これによってワーグナーの赤字はさらに増えた。11日第3回ウィーン演奏会。ブラームスも聴きにきた。批評は否定的であったが、ウィーンの貴族たちが募金してワーグナーを援助した。

1864年51歳、2月 ウィーン郊外ペンツィンのワーグナー住居を訪れたブラームスと親交を結んだ。31歳のブラームスは、ワーグナーの求めに応じて自作のピアノ曲「ヘンデルの主題による変奏曲とフーガ Op. 24」を弾いたという。この作品自体、二人の音楽の世界の相違をこれほど如実に明確に示す作品もないかも知れない。後に対立する関係になるが、この時点で二人は何を考えて、何を語り合ったのか。たいへん興味あることである。ワーグナーは長大で演奏が難しい自作品を弾くブラームスには感嘆しただろうか。たしかにワーグナーには不可能なことであった。自分をもっていないものをもって作曲家であると、直感的に感じ取ったことは確かであろう。

1865年6月、「トリスタンとイゾルデ」第2回公演、19日に第3回公演、この時ブルックナーがワーグナーを訪れる。これ以来、二人は生涯の知己となる。

1873年、ブルックナーが来訪し、「交響曲第3番」をワーグナーに献呈する。このことから、第3番は『ワーグナー』と呼称されることになった。ただし、恐るべき金字塔『第7番』とは比ぶべくもない。

1871年、ポローニャにおいてイタリア最初のワーグナー作品となる「ローエングリン」が上演された。かのヴェルディも観客の一人で、少なからず、ワーグナーのオペラは、以後、ヴェルディに影響を与えていくことになる。



《パイロイトで対面するリヒャルト・ワーグナーとアントン・ブルックナー》
オットー・ペーラーによる切り絵

恋

1834年（21歳）、「恋はご法度」を書き始めた頃に美しい女優ミンナ・プラーナーと出会い、交際が始まる。しかし、この二人はなかなか安定した関係にはならない。強い個性のぶつかり合いがあったからである。ワーグナーとミンナは婚約するが、二人の関係は常に不安定であった。

ケーニスベルクの小さな教会で結婚式を挙げた。そしてケーニスベルク劇場の音楽監督に就任した。彼らの新婚生活は常にいさかいが絶えない状態であった。



最初の妻ミンナ・ヴァーグナー（1809-66）オッターシュテット1835年制作

旅立ち 24歳 [1837年]

1834年、1月「恋はご法度」の総譜を完成する。「恋はご法度」はマクデブルクの劇場で初演されたが、稽古不足のため公演はたった1度だけの上演となり、大失敗であった。

そうした中で歌劇「リエッツィ」の制作作業が行われていく。

ワーグナーは、リガ（当時の帝政ロシア、現ラトビアの都市）で劇場と契約し、指揮をした。

25歳： 12月第3作目の「リエッツィ」の台本が完成し、すぐ作曲に取りかかる。

リガの劇場を解任され、債権者の目に触れないように、旅券は申請せずに密航とした。債権者を恐れ、全長 25m も満たない穀物運搬船で激しい嵐に 3 度も遭う。「さまよえるオランダ人」さながらの経験をし、死をも覚悟してロンドンに着き。同地に滞在することにした。

歌劇「リエッツィ」の成功 26歳(1839年)

パリでワーグナーが認められることはなく、オペラ座への自作の売り込みも失敗に終わる。これを契機にフランスに対して悪印象を抱くようになった。それでも、ベルリオーズの「劇的交響曲〈ロメオとジュリエット〉」に感銘を受け、ベルリオーズを訪問。

[1840年] 新聞〈ガゼット・ミュージカル・ド・パリ〉に小説「ベートーヴェン詣で」の連載(4回)を始める。借金地獄の中ではあったが、「リエッツィ」の総譜の完成を遂げることができた。

[1841年] ベルリオーズの「幻想交響曲」を聴き、大きな感銘を受けた。小説「パリに死す」を〈ガゼット・ミュージカル・ド・パリ〉に連載をしている(3回)。

彼のそれまでのオペラ「妖精」や「恋はご法度」はいわば習作オペラというべきものであった。第3作目のオペラ「リエッツィ」は、よりスケールの大きなオペラとなる。

[1842年] 「リエッツィ」(初演)は最高の大当たりをとった。「リエッツィ」の成功はワーグナーが29歳にして初めて得た、いや生涯の中でも最も栄えある社会的評価であったといえるかもしれない。

[1843年] 「さまよえるオランダ人」の初演は、「リエッツィ」の初演成功がもたらした恩恵での上演だった。「オランダ人」にはワーグナー自身の姿が投影されており、「オランダ人」から彼自身の姿が主人公として登場し始めることとなる。

そして、ライプツィヒではメンデルゾーン、パリではリストとの出会いがあった。

さらにワーグナーは、1500ターラーの年俸でザクセン王国宮廷指揮者に任命される(宮廷音楽家時代=1843-49年)。

7月ミンナとテプリッツで夏期休暇中を過ごし、ここで

グリム兄弟の「ドイツ伝説集」

ヤーコプ・グリムの「ドイツ神話」

を読み、これがワーグナーのゲルマン研究の発端となっていった。

そしてこの時「タンホイザー」(1845年作曲初演)に着手した。

10月ツウィーンガー宮殿に面した広い住居に転居し、ブライトコプフ・ウント・ヘルテル社製のグランド・ピアノを購入、壁にはドイツ画家のホルネーリウス(1783-1867)「ニーベルンゲンの歌」の扉絵を飾り(1817年銅版画制作)、さらに古典学、古代ゲルマン学や中世ドイツ文学などを中心とした蔵書約300冊を備えた。これが「タンホイザー」から「パルジファル」に至る題材源となっていく。

1848年4月に「ローエングリン」(1850年初演)の総譜を完成した。それはワーグナーのロマン・オペラの確立であり、彼の前期活動の終了と見てよいだろう。

ここで、「タンホイザー」に係る私の思い出の随筆を紹介する。

*****クラシック巡礼の旅 II-2 「巡礼の合唱」*****

2009. 12. 30 松本不二男

さて、とてつもないエベレストである。五味康祐が敢然と描き尽くしたワーグナーの門をたたいてみよう。全ての楽劇が3時間以上の長時間であるし、リスニング履歴が少ないから、自信が全くない。

それで、非常に解りやすいタンホイザーの「巡礼の合唱」を採り上げる。表題そのものでもあり、何となくみそぎの^{ざんげ}懺悔を洗い落とす旅らしくないであろうか。

楽劇タンホイザーは一度も聴いてないが、その序曲だけを聴いたときの驚嘆と感動には、サライじゃないけど胸が震えた。確か、ロブロン・マタチッチが振ったN響の定期公演のFM放送だった。静かで遙かに霞む霧の中に一筋の天上的な旋律が^{かほ}醸し出され、五味康祐いわく、戦車の無限軌道ならず無限旋律で延々と展開されそうで困ってくる。ただし、天国を夢見るような、勇ましい主題が、次第にクレシェンドしてきて、バイオリンの鳴きのユニゾン（斉奏）がさざ波で、そのエンベロープ（包絡線）が尾形光琳の^{はとう}波濤図のようにならぬ。このオーケストレーションでは、AM変調方式を知っていたのだろうかと思うと、背筋が凍る。

（実は、モーツアルトのラクリモーザが超有名だった。）

波濤図： 僕たちには、広重の富嶽36景のうち三浦半島から眺めた絵が有名であるが、原点は尾形光琳である。これをメトロポリタン美術館に秘蔵されているものをNHKスペシャルで見たときには度肝を抜かれた。

バイオリンのうねる波の間を豪壮なチューバが遠い前奏の主題を^ほ吠えるように叫び出して、ホルンの伴奏を得て^{ごうきゆう}号泣する。^{すき}凄まじいダイナミズムである。オーケストラの魔術師はラベルでなくワーグナーじゃないか。^{あきら}諦めきれないようにバイオリンは大きく鼓動のように波打つ。もう、^{うすぎたな}薄汚い欲心を捨てた神へのひたすらな信心、しかしながら豪華な合唱に包まれる巡礼とは何だろうか。信長も、始皇帝も及びじゃない。ロマンの限りを尽くした壮観とは、こんな表現なのか。幕が開いて、巡礼の合唱の場面では、100人以上の大合唱がチューバに代わって^{こうごう}神々しく歌われるのも、ミサ曲のキリエのように十分に聴きごたえがある。

これを聴けば、ワーグナーの宇宙スケールと浪漫的な奥ゆかしくも破戒的な曲調に誰しも取り込まれ、人類を毒する^{とうすい}陶醉にたじろいでしまうだろう。映画の「ルードヴィッヒ」を観ればわかる。若き18歳のバイエルン国王ルードヴィッヒが悪魔ワーグナーに見事に口説かれて、全資産をはたいて中世の名城「ノイシュバンシュタイン」を築城してしまったのだ。僕は、実物を見に行ったが、本当にお^{とぎぼなし}伽話のお城である。ワーグナーは、己の夢であるニーベルングの指輪の天空の城「ワルハラ」を現実にしたかったのだろうか、いや、僕にはディズニーの「眠れる森の美女」が永遠にこもる、森と溪谷に囲まれたブルー・シャトーとしか思えなかった。（余談になるが、ノイシュバンシュタイン城は、実は金策尽きて内装は一部未完成だった。）

ワーグナーを語るには、余りにも僕のリスニング・ライブラリは浅はかである。しかしながら、とにかく長すぎるのである。最短で1曲が3時間なのだから。ニーベルングの指輪4部作に至っては、4時間4日連続演奏である。このように、長大な楽劇というオペラの革進形態を完成させたのは、なんとベートーヴェンの合唱に基づいたのであるから驚きだ。天国的な安らぎの第九の第3楽章は、ワーグナーの無限旋律の基礎となり、かつ、ジークフリート牧歌に発展させて開花させたことは稀有でもある。しかも、リストの娘コジマを後妻にもらって産ませた男子をジークフリートと名づけて、産褥直後の朝に邸宅に管弦楽団を秘かに待機させ、コジマが目覚めるときを狙い澄まして、穏やかで平和な「ジークフリート牧歌」を初演したのだから、愛妻の献身への祝福とは言え、桁外れである。

楽劇とは、演劇と音楽と舞台（美術）の三次元ベクトルを融合させたものを言う。このため、ワーグナーの独壇場であったバイロイトでは、今でも当時の舞台意匠に匹敵するように祝祭を毎年、催しているそう。これが影響してか、以後、ヴェルディもプッチーニの歌劇も、全て、舞台衣装の演出だけでも豪華を競い、歌舞伎どころではないと。

ただ、魔笛ならず全てが、甘い毒だらけの魔曲であることは、巡礼の合唱で感じ取れるような気がする。やがて、「トリスタンとイゾルデ」に僕が破滅的に耽溺しなければよいが。

僕の愛聴アルバムは、カラヤンのワーグナー・オムニバスであり、これには狂騒的なバックナールまで付いているから貴重だ。合唱盤は、グレート・オペラ・コーラス（フィリップス）が美しい。

----- 楽劇タンホイザー -----

場面は中世のドイツ。智勇に優れた騎士であるタンホイザーは、テューリンゲンの領主の親族にあたるエリーザベトと『清き愛』で結ばれたが、しばらくすると、女神ヴェーヌス（ヴィーナス）に誘惑されヴェーヌスベルク郷で愛欲に溺れる。タンホイザーは快楽で夢中のうちに、ふと故郷を思い出し、ヴェーヌスベルク郷から離れようと決心する。女神ヴェーヌスは引き止めるが、脱出し、故郷に帰る。エリーザベトと再会を果たすが。

歌合戦で、タンホイザーは『自由な愛』を主張して、ヴェーヌスを讃える歌を歌う。激怒した騎士たちに諫められて、悔やむが、時すでに遅い。領主に追放され、ローマに巡礼して教皇の赦しが得られれば戻ってきてよいと言われる。月日が経ち、エリーザベトは、戻ってくるようにと祈り続けている。ついに彼女は自らの死をもって赦しを得ようと決意する。親友ヴォルフラムの前に、ぼろぼろの風体のタンホイザーが現れる。彼は幾多の苦難を乗り越えて教皇に赦しを乞うたが、罪はあまりにも重く破門を宣告される。自暴自棄になって、再びヴェーヌスベルク郷にさまよう。愛欲女神ヴェーヌスへ再び引き寄せられていく。そこへエリーザベトの葬列が現れ、驚愕したタンホイザーは自害して彼女の亡骸に寄り添う。

以上

指名手配

1849年、1500ターラーの年俸でザクセン王国宮廷指揮者(宮廷音楽家時代=1843-49年)として、安定した生活を送っていた。しかし、徐々に彼の体制批判精神がもたげてくる。

4月 論文「革命」を〈フォルクスプレッター〉に掲載する。ザクセン国王は帝国憲法を拒否し、議会を解散した。民衆は帝国憲法の承認を求めて蜂起した。〈フォルクスプレッター〉は発禁となり、レッケルはプラハに逃走した。

5月 市民兵とザクセン軍歩兵との市街戦になった。ワーグナーも積極的に関与した。これによってワーグナーは、彼自身の逮捕の危機状態を自ら招いた。

戦闘が再開され、ワーグナーはバリケードの構築を監督し、市内を動き回る。聖十字架教会の塔で軍の動静を見張る。6日プロイセン軍の介入が始まり、7日旧歌劇場が炎上し、ワーグナーに放火の嫌疑がかかった。ワーグナー夫妻は60キロ離れたケムニッツに逃げ延び、妻ミンナを同地の姉の家に避難させた。ワイマールに着く。リストと同棲するヴィトゲンシュタイン公爵夫人を訪問した。

5月 ついにドレスデン市警察本部よりワーグナーの指名手配状が発せられた。

逃亡

ここからパリが目的地であったが、リストらの忠告に従い、バイエルンを乗合馬車で通過してスイスを経由するルートを取る。旅費はリストが出した。

6月 パリに到着するが、パリではコレラが流行していたため、郊外のリュエイクに滞在する。そしてリストより旅費300フランを貰い、チューリッヒへ行くことに決めた。

チューリッヒに亡命 1849-51年

1849年、7月チューリッヒに戻り、ミュラーの所にいた。この時論文「芸術と革命」を数日で書き上げた。ここで総合芸術という概念が初めて出てくる。「未来の芸術作品」を完成。「芸術と革命」と「未来の芸術作品」は、後の「オペラとドラマ」(1851年)の前触れともいべきものであった。

4月チューリッヒの郊外エンゲ地区に転居。4月中旬に1週間の予定でパリへ。ミンナにワーグナーは、別居を求める手紙を書く。その後ミンナがパリに来るが、それを察知したワーグナーはジュネーヴに逃げた。

1851年 2月11日「オペラとドラマ」(最終稿)を完成した。「オペラとドラマ」はすでに台本草稿を部分的に書き始めていた「ニーベルングの指輪」の音楽論的基盤となる。

奇跡 1852-57年

1852年、シュヴェリーンで「タンホイザー」が上演され、これ以後亡命者ワーグナーの作品上演がドイツ内で次第に広まっていく。この後10年間に「ローエングリン」迄の作品が、約100のドイツの劇場で上演された

2月にワーグナーはチューリッヒで、富豪ヴェーゼンドンク夫妻と初めて会った。この時、夫人のマティルデ・ヴェーゼンドンクに魅せられ、彼の以後の創作に深く影響する。

この夫妻と やがてのバイエルン国王ルートヴィッヒ IIとの遭遇が、借金症候群のワーグナーを救い上げる。



マティルデ・ヴェーゼンドンク ↓



オットー・ヴェーゼンドンク



[ワーグナーとヴェーゼンドンク夫妻 - Google 検索](#)

コジマ

1853年3月 リストにワイマール宮廷を介しての恩赦の可能性を依頼する。ワイマールでリストの指揮で「さまよえるオランダ人」、「タンホイザー」、「ローエングリン」が連続上演された。10月 パリに着き、リストとその子どもたち、ブランディーネ（18歳）、コジマ（15歳）、ダニエル（14歳）と会食、これがコジマとの初対面となる。

[1854年] 1月14日 「ラインの黄金」の作曲の全体草稿を完成した。15日リストに経済的困窮と憂鬱を訴える手紙を送っている。

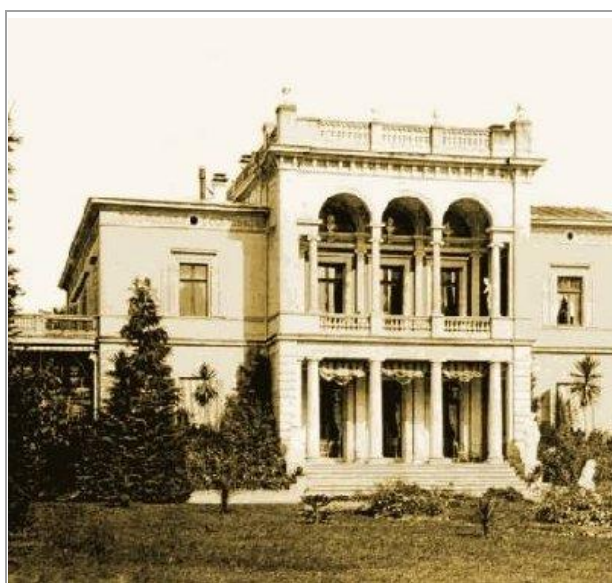
[1855年] 7月14日-1856年3月23日にかけて「ワルキューレ」全曲清書を行った。

[1856年] 4月、ドレスデンでの革命に参加したことを悔い始める。リストへの手紙に下記のように述べた。これもワーグナーの人間的特質を示す興味ある点であろう。

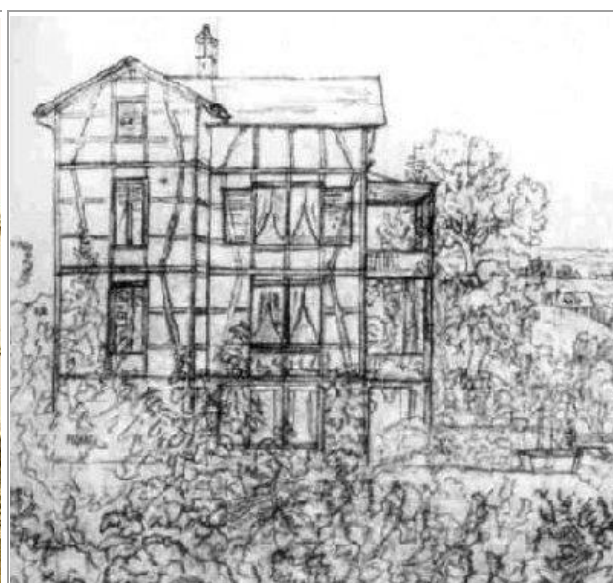
リストへの手紙：「今では、自分が当時、誤った考えにとらわれ、激情に走っていたように思われる。」

5月 ワーグナーは、ザクセン国王ヨハンに恩赦の嘆願書を送る。だが、却下された。

[1857年] 4月チューリッヒ湖を望む緑の丘に建設中のヴェーゼンドンク邸に隣接した隠れ家に入居する。オットー・ヴェーゼンドンクが購入改築し、年額800フランでワーグナー夫妻に提供した。



緑の丘のヴェーゼンドンクの新邸:1857年撮影



ワーグナーの隠れ家:メイヤー1851年制作

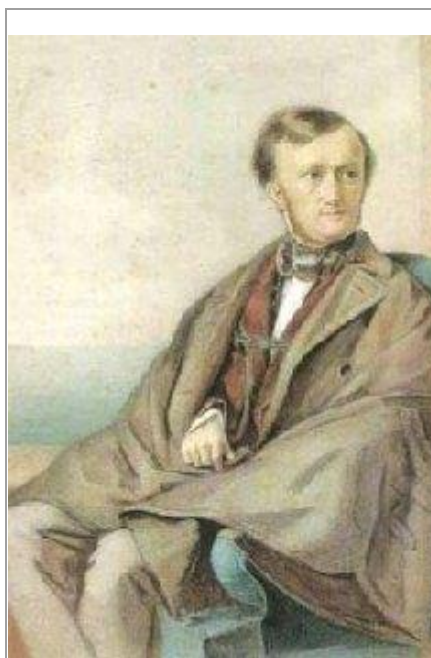
1857年、ハンス・フォン・ビューローとコジマ・リストがベルリンで結婚する。彼は、オーケストラの指揮において右に出るものないほど卓越し、人気もうなぎ上りであった。ワーグナー作品においては、非常な興味を持ちその指揮においても筆頭株でもあり、欧州の音楽界では引っぱり手だったという。妻コジマのワーグナーとの浮気には、ほとんど無口だったらしいが、どうも、それはワーグナー音楽への尊崇が激しすぎたのではと思いやられる。だから、ビューローは、やがてのコジマからの離婚要望に対しては意外に円滑に応じた。

22日ヴェーゼンドンク夫妻、緑の丘の新邸宅、つまりワーグナーの隠れ家隣りに入居する。
31日新婚旅行中のビューローとコジマ夫妻がヴァーグアナーのもとを訪れた。

9月ワーグナー家の夕食会で、ミンナ、コジマ、マティルデが初めて顔を合わせる。「ジークフリート」全体草稿をビューローが初見で、見事にピアノを弾き、ワーグナーが歌う。心を閉ざしたと見えるコジマは感想を求められ、泣き出すのみであった。ワーグナーはコジマについてこの時、特別の印象を刻みつけたようである。

マティルデ・ヴェーゼンドンク と「トリスタンとイゾルデ」 44歳 1857-61年

[1857年] 9月、完成した「トリスタン」台本韻文初稿が、マティルデ・ヴェーゼンドンクに捧げられた。大喜びしてワーグナーを抱擁したが、コジマはますます心を閉ざす様子であったという。 9月28日コジマは夫ハンス・フォン・ビューローと「トリスタン」台本の写しをもって、ベルリンに帰って行った。



1859-68年頃のワーグナー



妻ミンナと愛犬



1877年ロンドン: ワーグナー夫人となったコジマ

[1858年] 1月13日「トリスタン」第1幕第二全体草稿を完成。 14日、「トリスタン」の献呈が原因で、案の定、ヴェーゼンドンク夫妻に不和が生じた。

8月6日 午後4時30分 「トリスタンとイゾルデ」総譜は完成された。この夕方、ここルツェルンにヴェーゼンドンク夫妻が来る。

[1860年] オットー・ヴェーゼンドンクは美しい妻マティルデをも、ワーグナーに提供したともいわれている。 1月「トリスタンとイゾルデ」の総譜がブライトコプフ・ウント・ヘルテル社より出版される。

バイエルン王 ルードヴィッヒ II

[1861年] 2月バイエルンの皇太子ルードヴィッヒがミュンヘンで「ローエングリン」を初めて観て、ワーグナーに心酔する。5月ウィーン歌劇場で「ローエングリン」の公演をワーグナー自身も観る。熱狂的な喝采を受けた。



即位 18 歳 [ルードヴィッヒ 2 世 \(バイエルン王\) - Wikipedia](#)

ドイツ追放の解除 1862年

[1845年] 「タンホイザー」を書き上げてしばらくした7月に「マイスタージンガー」の散文草案が作られた。だが、彼の興味は「ローエングリン」に変わっていった。

[1862年] 3月28日ザクセン王国法務省はワーグナーの帰国を許可した。これによってワーグナーのドイツ追放が全面的に解除されることとなった。

その中でこのオペラ上演実現のためには私的な基金か王侯の資金が必要だと述べていた。

これがバイエルンの国王ルードヴィッヒⅡの目にとまった。そして自分が指名されると国王は思いこむようになる。18歳で即位直後の王の最初の仕事は、逃亡生活で行方知れずのワーグナーを探し当てることであった。

コジマと結婚の黙契 1863年

[1863年] 1月1日ワーグナーは第2回ウィーン演奏会を開いた。これによってワーグナーの赤字はさらに増えた。

11月28日 ベルリンでワーグナーは、ビューロー夫人コジマを訪問した。午後コジマと馬車で遠乗りし、二人は馬車内で結婚の黙契を交わす。

ルードヴィッヒⅡからの招請

1864年（ワーグナー：51歳）

3月 ルードヴィッヒⅡは18歳で、バイエルン国王に即位した。ワーグナーの方はドレデンで指名手配の逃亡生活、さらに雪だるま式に増えた借金まみれの社債務拘留を逃れてウィーンから脱出するという惨めな生活だった。24日-25日ミュンヘンに立ち寄った時、自分の身の上と対照的な華麗なバイエルンの国王の姿を目にする。それは街角のショーウィンドに飾られたルードヴィッヒⅡの肖像画であった。その若さと美貌に大きな感動を覚えた。

5月 運命は動いた。放浪の旅を続け、シュトゥットガルトへ移動していたワーグナーのもとへバイエルン国王ルードヴィッヒⅡの使い、王宮中書記官プフィスターマイスターの来訪を受けた。王の書記官は王の肖像写真と指輪を渡し、ミュンヘンへの招待を申し入れた。なんとその日の夕刻、ワーグナーはそのプフィスターマイスターと共にミュンヘンに向かったのである。こうして未だ逃亡生活を送っていたワーグナーにとっては180度転換した運命が始まった。それは、ザクセン王国法務省はワーグナーの帰国を解き（1862年3月28日）、バイエルン国王がワーグナーを探し求めていたのである。

5月4日 ミュンヘンの王宮で王と面会した。9日王から4000グルデンの贈与を受け、債務の返済に充てることができた。更に今後8000グルデンの年俸を得ることになった。14日シュタルンベルク湖畔のケンプフェンハウゼンに、王が借り上げたペレット館に入居して、近くのベルク城に居住する王との親交の夢のような日々が始まる。以後ルードヴィッヒⅡから十分な庇護

を受け、ワーグナーにとって最大のパトロンとなる。

6月 コジマはワーグナーの招きに応じて、娘ダニエラとブランディーネの2人の娘を連れてやって来た。これによって二人の関係はより深いものとなったと思われる。

8月 ホーエンシュヴァンガウ城で国王19歳の誕生日を祝う。リストがワーグナーの家、ペレト館を訪れた。娘コジマとビューローの夫婦関係に心を痛めていたからである。

10月 ワーグナーは、ケンプフェンハウゼンのペレト館からミュンヘンに移った。まずはホテル：バイリッシャー・ホーフに滞在する。7日国王はワーグナーに「ニーベルングの指輪」の完成を公式に命令した。

ワーグナー&コジマの：第一子誕生 52歳 [1865年]

4月 夫と娘2人もちのコジマと、妻のあるワーグナーとの間に第一子イゾルデが生まれた。なんということであろう、丁度この日にコジマの夫ビューローは、「トリスタンとイゾルデ」のオーケストラ練習を開始している。

6月10日 「トリスタンとイゾルデ」が、ついに国王臨席、ミュンヘン宮廷歌劇場で初演された。ビューローが指揮を担当した。上演は成功ではあったが。6月13日「トリスタンとイゾルデ」第2回公演、19日に第3回公演、この時

ブルックナー

がワーグナーを訪れる。これ以来、二人は生涯の知己となる。

10月 国王は新しく雇用契約を結び、4万グルデンを支給することになる。内閣金庫は紙幣でなく銀貨で支払ったので、取りに行ったコジマは2台の馬車に積んで持ち帰らなくてはならなかった。

ミュンヘンからの退去命令 1865-66年

[1865年：52歳]

「ジークフリート」第2幕総譜草稿を完成した。6日内閣は国王に、ワーグナーを遠ざけなければ総退陣すると脅しをかけたので、仕方なく王はワーグナーに暫時の退去命令を出した。

考えてみれば51歳のワーグナーと19歳の国王の友情などあり得ず、おまけにバイエルン王国の政治にまで口出しをし、多くの敵をつくり、ドレスデン革命時のワーグナーについての論議も蒸し返されたからである。

[1866年] 24日別居中の妻ミンナがドレスデンで死去する（享年56歳）。ビューローと離別していないコジマとワーグナーは、夫婦同然となっていた。

4日 ワーグナーはトリープシェンに行って、別荘の賃貸契約を結び、ジュネーヴからトリープシェンに移った。家賃は王が負担することになった。王からお金を絞り出すことにかけては、天才的であったワーグナーである。

5月 ついにコジマがハンス・フォン・ビューローとの間の3人の娘ダニエラ、ブランディー

ネ、イゾルデ（ワーグナーとの娘）を引き連れて、トリープシェンにミュンヘンから移住して来た。

8月 プラハ講話条約とプロイセンとオーストリアは、戦争終結する。こうしたビスマルクのドイツ統一政策によって南ドイツのカトリック勢力ではなく、軍事力のあるプロテスタント勢力のプロイセンによるドイツが、力を持つであろうとワーグナーは悟った。

[1867年]

2月 ワーグナーとコジマの第二子エーヴァが、トリープシェンで生まれた。なんとその日の午後にビューローがやって来る。コジマはビューローに許すのではなく理解せよ、と言ったという。なんとという自己中心的な言動だろう。

10月 コジマの父リストが来訪し、ワーグナーとコジマのことを話し合う。

1868年3月9日 ルードヴィッヒIIのワーグナーへの手紙

「これ以上あなたからの便りに接しないことに、もはや私は耐えられない。」

「ラインの黄金」初演

[1869年]

1月 コジマが日記を記し始める（1869 -1883 ワーグナーの死までの14年間）。

5月 ワーグナーが、ベルリン王立アカデミー国外会員に選ばれる。17日ニーチェが初めてトリープシェンに来る（ニーチェのワーグナー訪問は1872年までに23回となる）。

6月 コジマとの第三子長男ジークフリートが生まれた。

同月 「ジークフリート」第3幕第一全体草稿を完了した。15日コジマは夫ハンス・フォンビューローに手紙を書いた。その中で離婚の承諾をすることと、ハンス・フォン・ビューローとの間の娘ダニエラとブランディーネの養育を自分に委ねることを求めた。ハンス・フォン・ビューローは2日後にすべてを承諾する返事をして来た。

9月 ミュンヘン宮廷歌劇場で「ラインの黄金」が初演されるが、こうした「ニーベルングの指輪」の分割上演を望まないワーグナーは、その上演には居合わせなかった。だが、リスト、サン=サーンス、ヨハヒム、パドゥルー、ハンスリック、ヴィアルド夫人、ツルゲーネフなど音楽界や社交界の名士が集った。

「ワルキューレ」初演とコジマとの結婚

1870年 57歳

[1870年]

6月 「神々の黄昏」第1幕第一全体草稿を完了した。

「ラインの黄金」に続いて「ワルキューレ」の上演を国王は望んでいた。それに対して一般公開での分割上演はしたくないという希望を、手紙で述べている。

1870年 6月15日 ワーグナーのルードヴィッヒIIへの手紙

《ワルキューレ》は陛下ご自身のための隔離上演とし、観客の入場をお許しになされませんよう、重ねてお願いいたします。

ワーグナーは「指輪」の分割上演を望んでいない。しかし、王の命令で26日「ワルキューレ」初演がミュンヘン宮廷歌劇場で行われた。今回もワーグナーは欠席、リヒターもワーグナーと一緒にトリープシェンに止まっていた。



RICHARD AND COSIMA WAGNER.

1870年8月57歳 ルツェルンのプロテスタント教会（ルター派）でコジマ（32歳）と正式結婚した。

9月 メッツとセダンの戦いでフランス軍がプロイセン軍に降伏し、プロイセン勝利となる。

11月 ルードヴィッヒIIは、皇帝書簡書く。それはプロイセン国王にドイツ皇帝への即位を、要請するものだった。

5日のコジマの誕生日の朝、トリープシェンの家の階段の間で「ジークフリート牧歌」の予期せぬ初演が行われた。目覚めたコジマを不意打ちするような出来事は、彼女をたいへん喜ばせたという。

パイロイト祝祭劇場の決定 1871年

2月 「ジークフリート」第3幕総譜清書を完了した。ワーグナーとコジマ、子供たちはチューリッヒのヴェーゼンドンク夫妻を訪れた。翌日にヴィレ夫妻を訪問してトリープシェンに帰る。

4月3日 ニーチェ、トリープシェンを訪れる。ワーグナーは「舞台祝祭劇《ニーベルングの指輪》の上演について」の執筆を終わる。15日コジマとドイツに行き、アウグスブルクで宮中書記官と会う。王は「ジークフリート」の第1幕と第2幕を上演したい意向をワーグナーにたずねるが、ワーグナーは拒否した。

4月 ワーグナー夫妻は、2人で初めてパイロイトへ行った。パイロイトはバイエルン王国の中でも僻地であった。ここに住み、祝祭劇場を建てることを決意した。

5月 ベルリンの王立劇場で皇帝と皇后の臨席で自作などを指揮した。12日ライプツチヒにおいて第1回パイロイト祝祭を1873年に開催すると予告した。

パイロイトへ移住 59歳

[1872年]

2月 パイロイトにおけるワーグナーの邸宅建設用地が購入される。そして祝祭管理委員会が設立された。

4月 「神々の黄昏」第3幕第一全体草稿を完了した。22日-24日にワーグナーはトリープシェンからパイロイトに移住した。

30日にコジマと子供たち6人がパイロイトにやって来て、ワーグナーと合流した。

5月 ワーグナーは59歳の誕生日であり、午前11時から祝祭劇場定礎式が執り行われた。次いで辺境伯歌劇場での式典で式辞を述べた。午後5時のコンサートでは、ベートーヴェン「第九」を指揮した。

9月 ワーグナー夫妻は関係修復のため、ワイマールのリストを訪問した。

10月 リストが初めてパイロイトを訪問した。31日にコジマはカトリックからルター派信徒に改宗した。これはワーグナーとの3人の子供の洗礼のためでもあったと思われる。

パイロイト祝祭劇場棟上げ式 1873年 60歳

3月 「ローエングリン」が、初めてミラノ、スカラ座で上演された。

8月 パイロイト祝祭劇場棟上げ式が行われた。リストも出席する。30日「ニーベルングの指輪」の全曲公演をめざした祝祭劇場建設は、大幅に遅れを見せた。

11月21日ミュンヘンで宮中書記官デュリップと国王による祝祭事業支援の協議がなされた。だが、この時王の関心はノイシュバンシュタイン城の建設(1869-86)にあって、この会見は徒労に終わった。

12月 ルードヴィッヒIIよりマクシミリアン勲章を受ける。ブラームスも受けたと知り、送り返そうとした。ワーグナーのブラームスへの考えが推し量られる出来事であった。

私邸ヴァーンフリート館と「ニーベルングの指輪」の完成

[1874年]

1月6日バイエルン宮中書記局は、バイロイト祝祭への資金援助を拒否した。これによって祝祭事業が破産の危機に瀕す。しかし王の考えは違っていた。下記の手紙の通りである。

1874年1月25日 ルードヴィッヒⅡのワーグナーへの手紙

このようにして終わらせてはならない。援助の手を差し延べねばならぬ！ 私たちの計画が挫折するようなことがあってはならない。

2月 祝祭管理委員会と宮中書記局の間で、内閣金庫から10万ターラーの貸付け契約が整う。これで建設継続が可能となった。この債務はワーグナーと子孫によって徐々に返済されていくことになる。

4月 ワーグナー一家は、ついに新築されたヴァーンフリート館に入居する。建設のためにルードヴィッヒⅡから2万5000ターラー貰う。

6月 ニーチェはバーゼルでブラームスの「ドイツ軍勝利の凱旋歌」を、作曲者の指揮で聴いた。12日にも再度ニーチェは、ブラームスの「凱旋歌」を聴いた。ニーチェのブラームスへの傾斜が見られる。

9月10日「ワルキューレ」の総譜初版がショット社より出版された。

「ニーベルングの指輪」4部作 [1874年]

25年もかけて、ついにここに完成となる。この作品についての一般的で代表的な見解の一つは次のようである。それは、彼のめざす理想であるキリスト教以前の太古の神秘と哲学・革命・美学思想が一体となり、ドラマと音楽が参加する総合芸術の展開である、としている。

この21日の午前に妻は作曲する夫に気晴らしにと思い、リストから来た手紙を夫に見せるが、夫は興味を示さないので妻はむっとする。正午に夫はわざと冷淡な態度で、完成した総譜を妻の前に置いた。妻は夫の皮肉れた態度に泣き、夫は自分と一緒に喜んでくれない妻に不満をもつ、というような奇妙で未成熟な様子の二人であった。

12月25日ヴァーンフリート館（ワーグナー宅）で「子供たちの問答」が、12月に完成した小オーケストラ版で演奏された。そして「神々の黄昏」の最後の部分も試演された。

第1回バイロイト祝祭開幕 1876年

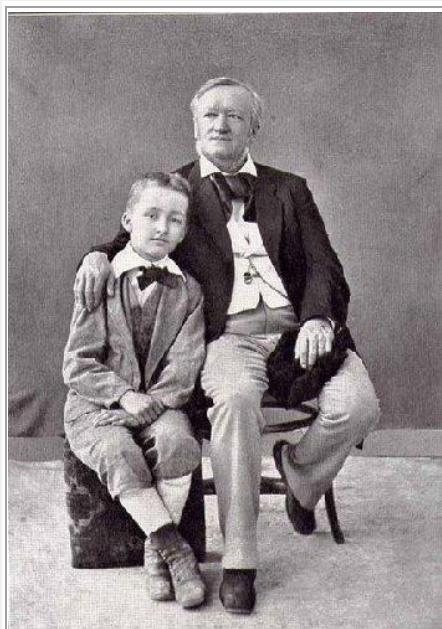
7月14日-26日「ニーベルングの指輪」の第2回通し練習が行われた。24日ニーチェはバイロイトで「神々の黄昏」第1幕練習を頭痛に苦しみながら観た。

1876年8月13日-30日第1回バイロイト祝祭開幕。「ニーベルングの指輪」3チクルス上演された。ようやく開場にこぎ着け、四半世紀以来の宿願を果たしたことになる。こけら落としには2人の皇帝（ドイツ皇帝ヴィルヘルムIとブラジル皇帝）と2人王（バイエルン王とヴェルテンベルク王）が、姿を見せた。これにドイツの王侯貴族や実業家、ヨーロッパ各国の音楽家 ex. リスト etc、多くの友人、知人、またハンスリックをはじめとする敵対的な批評家もやって来た。

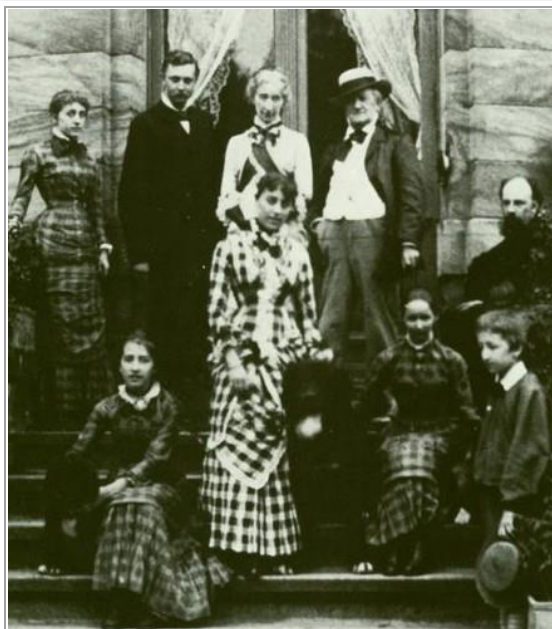
13日「ラインの黄金」、14日「ワルキューレ」、16日「ジークフリート」、17日「神々の黄昏」、20日-23日第二チクルス、27日-30日第三チクルス：秘かにルードヴィッヒIIも臨席していた。

かの「資本論」の著者カール・マルクス K. Marx (1818-83) は、エンゲルスへの手紙の中で“国家楽師ワーグナーのバイロイト阿呆祭”（18日）と、殺到する群衆について揶揄した。たしかに祝祭は膨大な赤字14万8000マルクを残した。

10月 ルードヴィッヒIIに手紙を書き、次のような自分勝手な提案を述べている。それは、ドイツ帝国がすべての負債を支払うこと、その代わり祝祭劇場をドイツ帝国の固有財産とする。そして毎年祝祭を開催すること、それが受け入れられればバイロイト市に祝祭劇場を委ねる。500-600席を貧しい人々に無料提供することも条件にした。27日ソレントでニーチェは、4人の友人とワーグナーに会う。数日間頻繁に彼らはワーグナーを訪問し、この期間にニーチェのワーグナー離れが決定的となる。



1880年：長男ジークフリートとワーグナー

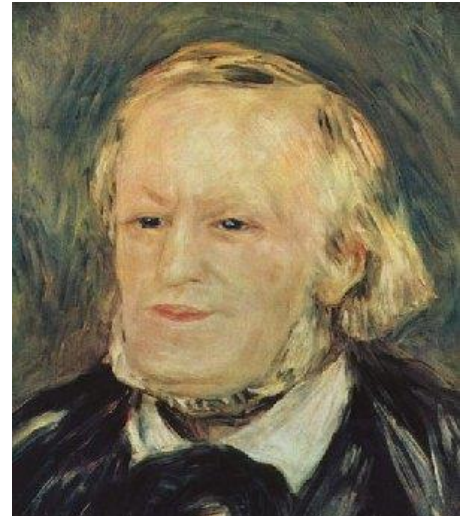


1881年：家族全員と2人の友人

[1882 年]

1 月 最後のオペラ「パルジファル」の総譜の完成を見た。シヨット社は印税として、ワーグナーに 10 万マルクを支払った。15 日同じくイタリアに旅行中のルノワールがパレルモのワーグナーを訪れ、肖像のスケッチを描く。後に右の油絵として完成された。

□



昇天 [1882 年]

9 月 14 日-1882 年 2 月 13 日ワーグナーは重い心臓発作を起こす。家族と共にイタリアに向かい、16 日ヴェネツィアに着く。18 日大運河に面したヴェンドラミン=カレルジ館の中 2 階を 3 年契約で借りる。

2 月 13 日（70 歳） 自室の机に向かって記していたワーグナーは心臓発作を起こす。知らせを聞いて駆けつけた妻コジマ（45 歳）の腕に抱かれて、午後 3 時 30 分頃、息を引き取った。

14 日彫刻家アウグスト・ベンヴェヌーティが、ワーグナーのデスマスクをとった。コジマが一切食事を受け付けないと伝え聞いた元夫ハンス・フォンビューローは、彼女に電報を送った。

“妹よ、生きなケレバナラヌ”

参考:[ワーグナーの生涯 \(coccan.jp\)](http://coccan.jp)

楽劇『ニーベルングの指環』あらすじ

『ラインの黄金』、『ワルキューレ』

『ラインの黄金』あらすじ

「ラインの黄金」から作られた指輪を手にした者は、「限りない力」を獲得する。この物語は、その指輪をテーマとしている。本稿では、長大な全四部作に言及するのではなく、その中枢となる『ワルキューレ』に焦点を当てて要約をまとめる。

【第1場】 アルベリヒ(地底人)がライン川の底にある「ラインの黄金」を盗み、指輪を作る。

【第2場】 天上では、巨人族が神たちの城の建設を完成させています。巨人族は、報酬としてヴォータン(大神)らに指輪を要求。

【第3場】 ヴォータンらが、アルベリヒから指輪を奪う。

【第4場】 怒ったアルベリヒが、指輪に「死の呪い」をかける。指輪を手にした巨人族は、死の呪いで殺し合いをしてしまう。最後に神々が、完成した城に入城して幕が下りる。

指輪は 次の順で渡っていく。

アルベリヒ(地底人) ⇒ ヴォータン(大神) ⇒ ファフナー(巨人)

『ラインの黄金』と『ワルキューレ』間の出来事

神々の長ヴォータンは「神々の終焉」を恐れ、知恵の女神エルダを訪れる。そこでエルダとの間に子供ブリュンヒルデをもうける。他の女神との間にも子供を作り、**ブリュンヒルデ**を筆頭に9姉妹をワルキューレとして育て上げる。

また、ヴォータンは指輪を取り返したいが、契約のため自らでは取り返せない。そこで人間界に降り、名をヴェルゼと名乗って、人間との間に双子の兄妹を作る。

それが、**ジークムント**と**ジークリンデ**である。

舞台は人間世界に変わり、ヴォータンは指輪の呪いがかかった神々の運命を変えようと、ヴェルズング族の人間女性にジークムントという男の子を産ませた。ある夜、嵐にあったジークムントはフンディングという男の家に避難し、そこでフンディングの妻ジークリンデと恋に落ちる。最初、ジークムントはフンディングが世話してくれたことに感謝していたが、フンディングとの会話の中で次第に彼が一族の敵であること、そして彼の妻ジークリンデが生き別れの妹であることを知り、遂に、ジークムントは彼に決闘を申し込みます。ヴォータンはジークムントを勝たせようとする。

主な役柄

ウェルグンデ、フローシュヒルデ、ヴォーグリンデ	人魚でラインの娘たち。ライン川の黄金の守護者	(メゾソプラノ/アルト/ソプラノ)
ヴォータン	/放浪者。大神であり、世界の支配者	(バリトン)
フリッカ	結婚の女神であり、ヴォータンの妻	(ソプラノ)
フレイア	女神で永遠の若さのリンゴの守護者、フリッカの妹	(メゾソプラノ)
ドナーとフロー	神々でフリッカの兄弟	(バリトン/テノール)
エルダ	女神でノルンの母	(Alto)
ローゲ	半神でヴォータンの助手	
ファソルトとファフナー	巨人	
アルベリヒ	ニーベルンゲ	
マイム	ニーベルンゲでアルベリヒの弟	
ジークムント	ヴォータンの息子で、ジークリンデの兄	(テノール)
ジークリンデ	フンディングの妻で、ジークムントの妹	(ソプラノ)
ブリュンヒルデ	ヴァルキリーで、ヴォータンの娘	(ソプラノ)
フンディング	ジークリンデの夫	(バス)
ジークフリート	ジークムントとジークリンデの息子	(テノール)
ドラゴン	ファフナーがドラゴンになった	(バス)
ワルトラウト	ヴァルキリーでブリュンヒルデの妹	(アルト)
グンター	ギビチュングの王	(バリトン)
グトルーネ	グンターの妹	(ソプラノ)
ハーゲン	ギビチュング、アルベリヒの息子	(バス)
ノーン	運命の女性たち	(メゾ、アルト、ソプラノ)

ワルキューレ(Walküre)とは

北欧神話において、戦場で生きる者と死ぬ者を定める女戦士(半神半人)、およびその軍団のことである。戦場で死んだ者の半分をオーディン(ヴォータン)神の治める死者の館ワルハラに連れて行く役割を担う。ワルハラでは、死んだ戦士たちは終末戦争ラグナロクに備える兵士エインヘリヤルとなるが、ワルキューレは彼らに蜜酒を与える給仕ともなる。また、ワルキューレは英雄をはじめとする人間たちの恋人としても登場し、そのような場合は王族の娘として描かれることもある。

ワルキューレは、13世紀に書かれた『スノッリのエッダ(散文のエッダ)』、『古エッダ(詩のエッダ)』などに記述が見られる。また、考古学的には、ワルキューレを描いたと考えられている魔除けなどが出土している。

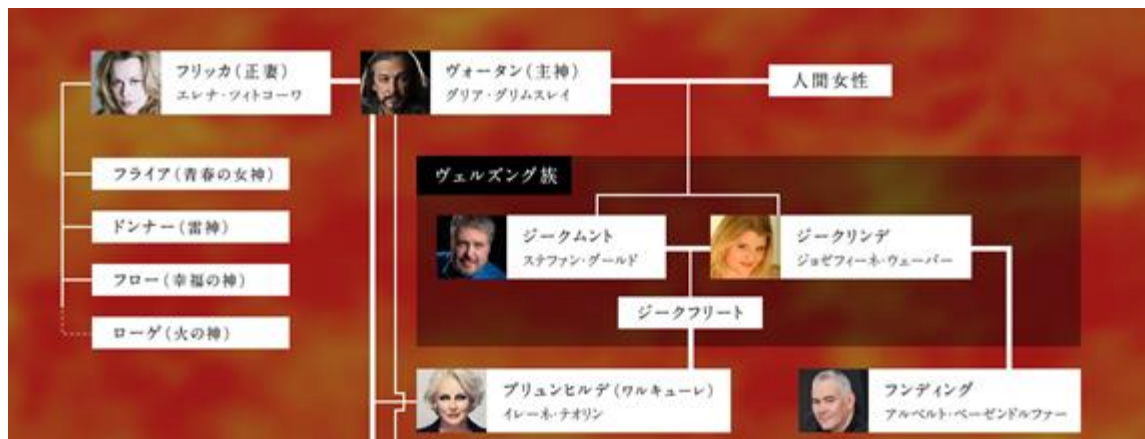
北欧神話に登場するノルンやディースといった存在は、いずれもワルキューレと同様に運命を司る超自然的存在である。



<https://ja.wikipedia.org/wiki/>

楽劇『ワルキューレ』

登場人物相関図



<https://www.nntt.jac.go.jp/opera/16walkure/guide.html>

主な登場人物

【神々】

ヴォータン (バリトン) : 天上に住む神々の主神

フリッカ (メゾソプラノ) : ヴォータンの妃

【ヴォータンと人間の女との間の子】

ジークムント (テノール)

ジークリンデ (ソプラノ) : ジークムントの双子の妹

【ジークリンデの夫】

フンディング (バス) : ジークムントの宿敵

【ワルキューレ】

ブリュンヒルデ (ソプラノ) : ヴォータンとエルダの娘。

他 8 人のワルキューレ

ワルキューレとは、“戦場において死を定めて勝敗を決める”女戦神のこと。彼女たちには、戦死した勇士を天上のヴァルハラ城へ運ぶ役割がある。9人のワルキューレが登場する。

『ニーベルングの指環』は、

- | | |
|------|-----------|
| ・序夜 | 『ラインの黄金』 |
| ・第1日 | 『ワルキューレ』 |
| ・第2日 | 『ジークフリート』 |
| ・第3日 | 『神々の黄昏』 |

の4部からなり、上演に約15時間も要する大作。台本は、北欧神話を基にしたワーグナーの独自の世界観が描かれている。

『ラインの黄金』と『ワルキューレ』の間の出来事

大神ヴォータンは“神々の終焉”を恐れ、知恵の女神エルダを訪れる。そこでエルダとの間に子供ブリュンヒルデをもうける。他の女神との間にも子供を作り、ブリュンヒルデと8姉妹をワルキューレとして育て上げる。

また、ヴォータンはニーベルング族のアルベリヒにライン河の黄金で作らせた指輪を、巨人族から取り返したいが、契約のため自らでは取り返せない。そこで人間界に降り、名をヴェルゼと名乗って、人間との間に双子の兄妹、ジークムントとジークリンデをつくり、ヴェルズング族を成す。

『ワルキューレ』の簡単なあらすじ

- 【第1幕】ジークムントとフンディングの妻ジークリンデは、互いに惹かれ愛し合ってしまう。ジークムントは宿敵フンディングとの決闘のために伝説の剣「ノトウング」を、トネリコの木から引き抜く。
- 【第2幕】ブリュンヒルデは、ヴォータンの命令に背いて、フンディングとの闘いにてジークムントを勝たせようとするが、ヴォータンが割って入り、ジークムントの剣ノトウングを砕いてしまう。結果、フンディングに負けて息絶える。
- 【第3幕】ジークリンデに、ジークムントとの子供ジークフリートが宿っていたことがわかり、ブリュンヒルデは深く同情が湧き、ヴォータンに成敗されそうなジークリンデを逃がすが、ヴォータンの命令に背いた罰として、岩山に眠らされる。ブリュンヒルデの岩山には、“真の英雄のみが近づける”ように呪（まじな）いがかけられている。

視聴可 『ワルキューレ』全曲 : Adam Fischer, Vienna State Opera, 2016.

<https://www.youtube.com/watch?v=NMTC4t6RHmw>

第1幕

あらすじ

フンディングの家

ジークムントが逃げてくる

ジークムントが嵐の中逃げまどい、見つけたフンディングの家の前で疲れ果てて倒れ込む。

彼は戦いで孤軍奮闘したが、武器を失ってしまった。

そこにフンディングの妻ジークリンデが現れ、彼を介抱するうちに、二人は兄妹と解りあうが。それでも、お互いに惹かれ、近親相姦という禁断の木の实を食べてしまう。

フンディングが帰宅

そして、フンディングが戻ってくる。彼はジークムントに身の上を尋ね、話が進むにつれ「ジークムントはフンディングが逃した敵」だったことが判明。

「一晩泊めた後に明日決闘する」ことが決まり、フンディングは妻と寝室へと消えます。

一人残ったジークムントは、父との約束を思い出す。父は別れる際に、「危機が迫ったときに剣を授ける」ことを約束していた。

ジークムントが“伝説の剣”を引き抜く

一方、ジークリンデは「ジークムントが生き別れた兄」だと悟る。そして、夫フンディングに眠り薬を飲ませ、ジークムントの寝床を訪れる。

ジークリンデはジークムントに、「フンディングに無理やりに結婚させられた」ことを話す。

そして、「トネリコの幹に“誰も抜けなかった”剣が刺さっている」と武器のありかを教える。

ジークムントは彼女を抱き、復讐を誓う。

二人は春の月光の下で再会を喜び、ジークムントの歌にジークリンデが答える。

ジークムントは、幹から誰も抜けなかった剣を引き抜き「ノートゥング」と名付ける。二人がフンディングの家から去る。

第1幕

前奏曲と第1場 〈ジークムントとジークリンデ〉

とあるあばら家の中。中央には巨大なトネリコの幹があり、その太く盛り上がった根は地中深くまで突き刺さっている。木のこずえは造作された屋根によって隔てられているが、屋根には隙間が空いていて、幹はそこを通り抜け、枝もあらゆる方向に向かって屋根を通り抜けて伸びている。木のこずえには葉が茂っているので、トネリコは屋根を越えて広がっていることがわかる。トネリコの幹の周りには居間がこしらえられているが、その壁は荒削りの板で作られており、ところどころ手編み手織りの壁掛けが掛けられている。

嵐のように激動するオーケストラ前奏曲が始まる。幕が開くと、戦士ジークムントが正面扉を開けて勢いよく居間に入ってくる。夕暮れどきで、激しい嵐はようやく収まろうとしている。

いったい誰の家だ？でも、とにかく休まねば。と、ジークムントはつぶやいて、気を失い背後にあおむけに倒れると、しばらく身じろぎもせずに横たわっている。ジークリンデが寝室から出てくる。彼女は夫が帰ってきたものとばかり思っていたが、かまどの前に見知らぬ男が寝ているのを見て、心底驚いた表情を見せる。

水をくれと言われたので、そのトネリコあばら家の女ジークリンデは、牛の角から造った盃を素早く手に取り、なみなみと満たした盃をジークムントに手渡す。

飲み終わったジークムントは盃を返し、その眼は彼女の顔に強く吸い寄せられていく

もし盾や槍が、せめて私の腕力の半分でも私を守ってくれていたならば、決して敵に背後を見せることもなかったであろう。ところが、盾も槍も砕けてしまった。

しばらくして、私の疲れは消え去りました。私は十分休息をとりました。と告げる。



ヴァーグナー「ヴァルキューレ」(coocan.jp)

第2場 (ジークムント、ジークリンデとフンディング)

ジークリンデは突然立ち上がり耳をすますと、屋外の小屋に馬をつけるフンディングの声を聞く。彼女は正面玄関に急いで走っていき、扉を開けると、槍と盾とで武装したフンディングが広間に入ってきた。ジークムントの姿に気づくと扉のところで立ち止まる。

フンディングは、傷を治してやったのか？ と訊く。こいつ……うちの奴に似ているぞ！と驚く。

<ジークムント> 私は、ウェーバールト(悲しみの男)と名乗らねばならないのです。
ヴォルフエという名の父親から私は双子として生まれました。双子の妹と私です。
生んだ母の顔も、いっしょに生まれた妹の顔も、ほとんど覚えていないのです。
ヴォルフエは強い戦士でしたが、敵がたくさんいました。
父は息子の私と狩りに出ました。
母は打ち殺されて横たわり、妹の姿は炎の中に消えていました。
父は家を追われて私を連れて逃げ、私は何年もの間、
深い森の中で父ヴォルフエと暮らしました。
私は、「狼の一族」ヴェルフイング族。

私はずっと槍と盾とで彼女をかばいましたが、軍勢に囲まれて、どちらも碎けてしまいました。

ジークリンデは、意を決しかねるように物思いにふけりながら、しばし立ちすくんでいたが、やがてためらうような足取りで、ゆっくりと納屋に向かう。もう一度立ち止まると、物思いのあまり放心したように、顔を半ばそむけ、横顔だけをこちらに向けたまま立ちすくむ。だが、やがて意を決したように落ち着いて戸棚を開けると、酒杯に酒を満たし、小さな容器に入った粉薬をその中に振りかける。彼女は階段でもう一度だけ振り向くと、憧れのこもった眼差しでジークムントを見つめ、その眼差しで語りかけるように、しばらくトネリコの幹の一点を凝視する。

第3場 (ジークムント、ジークリンデ)

<ジークムント> 父さんが話していた剣・・・ 最大の危機に直面したときに見つかる剣。

今、ぼくは丸腰で敵の家において、復讐のかたに取られて、ここにとどまっている・・・。

美しく気高い女性をぼくは見た。 心は歓喜と不安におののいている。

あの女性は、ぼくの心にあこがれを呼び覚まし、甘い魔法でぼくを引き寄せる・・・

なのに、よりによってその女性を、ぼくを無力と嘲笑うあの男が自分の意のままとしているなんて！

ヴェルゼよ！ ヴェルゼ！ あなたの剣はどこにあるのだ？

強き剣。

嵐の中で振るう剣。その剣は、ぼくの胸の中から現れないのか？

この荒れ狂う心の思いが剣とはならないのか？

急にかまどの火がはじけ、噴き出す炎から現れるどぎつい光が、突然トネリコの幹の一点を照らし出す。前にジークリンデが目で示していたその場所に、剣の柄が刺さっているのがはっきりと見える。

あそこでちらちらしている赤い光はなんだ？ トネリコの木から、どうしてあんな光が？

目が見えない人にも届くほどの輝き・・・ 楽しく笑いかけるような眼差し・・・

ああ、なんと心を気高く燃やす光だ！

もしかしたら、これは あの花のような女性が去った時、部屋に残していった眼差しの光だろうか？

夜の闇が目を覆ったとき、あの女性の眼差しがぼくに触れ、ぼくは、ぬくもりと光をこの手にした。

あの人の輝きは、太陽のように燦々と輝いて、ぼくを頭上から光で満たし、

山の向こうに沈んでいった。

去って行ってからも、もう一度、あの人の光は夕映えのように輝き、古いトネリコの木さえも金色に燃えた。

だが、今や花はしぼみ、光は消え、夜の闇が目を覆っている。

炎はもはや光を失い、この胸の奥に残るだけ・・・。

フンディングはぐっすり寝ている、私が眠り薬を与えた、とジークリンデがつぶやく。

<ジークリンデ> 武器のありかを教えます・・・ああ、もしあなたが手に入れば！

最高の勇士とお呼びしますわ・・・

最強の人にもみ与えられる武器なのですから。

さあ・・・私の言うことをよく聞いてください！ 一族の男たちが、この部屋に集まってフンディングの婚礼を祝っていました。

強盗たちが人目もはばからず贈り物とした娘をフンディングは妻としたのです。

彼らが酒盛りをしている間、私は悲しく座っていたのですが、

そのとき、見知らぬ人が入ってきました。

それは、青い衣装を身にまとった白髪の老人で、帽子を目深にかぶって、片目を隠していました。

ですが、残りの目の光だけでも男たち全員を不安にさせ、恐れおののかせるのに十分でしたが、

その瞳は、なぜか私にだけは、甘い憧れにみちた悲しみと、涙と慰めとを同時に与えてくれるようでした。

老人は私を見つめたあと、男たちをじろりと見やると、一振りの剣を手につかみ、トネリコの幹に、鏝まで深く突き刺しました。

これを幹から引き抜くことができる者にこそ、この剣はふさわしいのだと言い残して・・・。

しかし、並み居る男たちが、どんなに頑張っても、誰も手に入れることはできませんでした。男たちが何人も出たり入ったりして、最強と自負する者たちが剣を引き抜こうとしましたが、誰一人、報われることはありませんでした。

剣は、何事もなかったように、幹に突き刺さったままなのです・・・。

ですが・・・いま、私にはわかりました。

悲しんでいる私に会いにきてくれた人が誰だったのか。誰のために剣を木に刺したのか。

ああ・・・私は今ここで友に会いたいのです・・・

哀れな私のために、遠い国からやってくる友に。そうすれば、ずっと苦しみ悩んできたことが、辱められた心の痛みが、すべて甘美な復讐へと変わるのです！

失ったものを再びつかみ、なくして泣いていたものを、この手に取り戻したいのです。

神聖な友を見つけ、その勇士をこの手に抱きたいのです！

<ジークムント>

ご覧なさい。この部屋に射し込む春の微笑みを！冬の嵐は、歎きの月の前に消え去った。

春はおだやかに光りかがやき、やわらかな風に乗りながら、軽やかに愛らしく奇蹟を織りなしながら揺れていく。

森と野原に息を吹きかけ、まなこを見開いて笑いかける。

甘い小鳥の歌を歌い、心地よい香りを放つ。

温かな血のぬくもりで、よろこびの花を咲かせ、力を与えて新芽を吹かせる。

優美な力で、この世をつかさどり、冬も嵐も、その強い力の前には消え去る。

春の一撃の前には、ぼくらを春から引き離していた

どんな頑丈な扉も開かずにはいられなかった・・・。

春は、その妹である愛のもとに舞い込みましたが、愛こそが、春を誘ったのです・・・

ぼくたちの心の奥深くにあったものが、いまはじめて光を浴びて微笑んでいるのです。

春という兄が、愛という妹を花嫁とし、二人を離れ離れにしていたものは打ち砕かれました。

若者は、歓喜とともに結ばれ、春と愛とは一つになったのです！

あなたこそ春・・・私は待っていた・・・ 凍りつくような冬の間じゅうずっと。

心は聖なるおののきとともに、あなたを受け入れた・・・

あなたの瞳がはじめて私に向けられたとき。

今までは、すべてが見知らぬことばかりで、身近には悲しいことしかなかった。

何が起っても、私にはわからないことだらけだった。
でも、はっきりとわかったの…あなたのことは。
私があなを見つめたとき、あなたはもう私のものだった。

ジークリンデは我を失ったようにジークムントの首に腕を巻きつけ、近くから彼の顔を見つめる
ジークムントはこたえる。あなたの愛をうけたからには、もうそうは名乗らない。
あなたが好きな名をつけてくれれば、私はそう名乗る。

ジークリンデは、うなずいて、ヴェルゼが
貴方の父親で、貴方がヴェルズング族
ならば、
あの老人は、正に貴方のために、木に
剣を刺した。
ジークムント と、私はあなたをそう名付
けます！ と言い切る。

(木の幹におどりかかって、剣のつかを
つかむ)



<ジークムント>

我が名はジークムント！ジークムントこそ私！
剣よ、証人となれ！ひるまずに、お前をこの手にするのは私だ！かつてヴェルゼは言った。最大の
危機に陥ったとき、お前は剣を手に入れるだろう…と。
今こそその時だ！ 神聖なる愛の最大の危機(ノート)…
危機は、愛の憧れを私の心にかきたて、あかあかと胸に燃え広がりがりながら、
行動するのだ、死ぬのだと、私に迫ってくる…
ノートウング！ノートウング！これがお前の名だ、剣よ…
ノートウング！ノートウング！誰もがうらやむ剣よ！
切っ先鋭い刃を見せよ！ 鞘から姿を現すのだ！
怪力で一息に剣を鞘から引き抜くと、驚きと歓喜のうちにあるジークリンデに、その剣を見せる
さあ、ヴェルズング族のジークムントをご覧ください！
この剣を婚礼の贈り物とし、我が妻に選んだ最高の女性であるあなたを敵の家から奪い去るのは、
このジークムントなのです。
私とともに、ここから遠く離れた場所に行きましょう。
春が微笑む屋敷に行きましょう… そこでは、ノートウングがあなたを守ります。
ジークムントがあなたへの愛に生きる限り！

<ジークリンデ> 私の目の前にいるあなたがジークムントなら、
あなたを求める私はジークリンデと名乗ります。
あなたは、実の妹と剣とを一挙に手に入れたのです！

第2幕

第2幕のあらすじ

大神ヴォータンがブリュンヒルデに、「今日の決闘はジークムントに勝たせる」ように命じる。ブリュンヒルデは歓声を上げて、その場を去ります。

(Hojotoho! Hojotoho!)、 「Hojotoho! Hojotoho!」

ヴォータンの妃フリッカが「ジークムントの勝利」に不満

そして、ヴォータンの妃フリッカが現れます。フリッカは、

- ・人間との間に生まれた子に剣を与えたこと
 - ・ジークリンデとジークムントが、双子でありながら禁断の恋愛関係にあること
- の不満を訴え、ジークムントの処罰を求めます。

近親相姦は、神々のみに許されたものでした。

ギリシャ神話の最高神ゼウスと妃ヘーラーも夫婦であり、姉弟の関係にあります。豹変して「ジークムントの敗北(死)」を命じる。ヴォータンは戻ってきたブリュンヒルデに、「ジークムントではなくフンディングに勝利を与える」よう命じる。

ブリュンヒルデは反論するけれども、あがない難く父ヴォータンの命令を受け入れる。しかし、実際はブリュンヒルデが「父ヴォータンの命令」に従わない。

ジークムントとジークリンデが逃げているところに、ブリュンヒルデが現れます。ブリュンヒルデはジークムントに死を告知し、「あなたをヴァルハラ城へ連れていく。」と語ります。ワルキューレの役割は、“戦場の勇将の死を選定し、その死者をヴァルハラ城(天上)へ運ぶこと”である。つまり、天上では生き返ってワルハラ城の守護兵になる。

しかし、ブリュンヒルデは、「ジークムントがジークリンデを想う愛の強さ」に深く感動します。「ヴォータンの命令に背いて、ジークムントを勝たせる」ことを約束するが。結果は、裏切りを知ったヴォータンが急遽現れる。フンディングとジークムント、二人の決闘が始まる。

ジークムントが勝利をおさめようと剣を振りかぶった時、ヴォータンが割って入り、ジークムントの剣はヴォータンの魔槍で砕かれ、フンディングの槍が剣を失ったジークムントの胸に突き刺さる。

ブリュンヒルデは“ショックで気絶したジークリンデ”を馬に乗せて、砕けた剣の破片を持ち、その場から逃げる。ヴォータンはフンディングを呪殺し、逃げた裏切り者ブリュンヒルデを追う。

楽劇 ワルキューレ 対訳 2/3

<https://w.atwiki.jp/oper/pages/91.html>

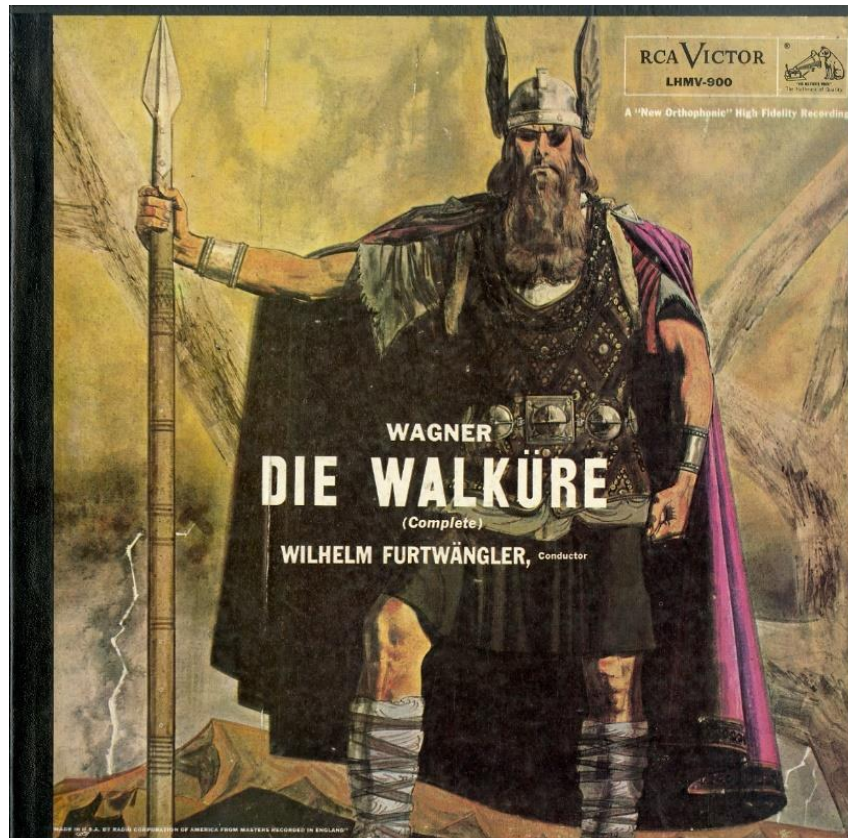
前奏曲と第1場 (ヴォータン。ワルキューレ姿のブリュンヒルデ。後にフリッカ)



ヴォータンは戦いに備えて武装し、槍を手にしている。

<ヴォータン> 馬の準備をするのだ。女战士们ちよ！
もうすぐ激しい戦いが始まるぞ。
ブリュンヒルデよ。戦場へ逃げ！
ヴェルズング(ジークムント)に勝利を齎すのだ！
フンディングは、身の丈にふさわしい所へ行くがいい。あんな奴はワルハラには無用だ。
さあ、すぐに武装し、戦死者のもとへと騎行せよ！

ヴォータン



(喜びの声をあげながら、左の岩から右の岩へと飛びまわる)

ホヨトホー！ホヨトホー！

ハイアハー！ハイアハー！ホヨトホー！ハイアハー！

(高い岩の頂で立ち止まり、背後の谷底をのぞきこむと、ヴォータンに向かって叫ぶ)

お父さんのほうこそ、気をつけてね。

ひどい嵐を我慢することになりそうよ。

お父さんの正妻のフリッカが 雄羊の車に乗って、やってくるわ。

ああ！あんなに金のムチを振るうなんて！

可哀そうな羊たちが、怖がってうめき声をあげ、車輪がひどくガタガタきしんでいる。

激怒して口論しにくるんだわ！ でも、ロゲンカなんて、私は好きじゃない。

男らしい勇敢な戦いなら大好きだけどね！だから、あの嵐はお父さん一人でのいでね。

見殺しにするみたいだけど、陽気なあたしが出る幕じゃないわ！

ホヨトホー！ホヨトホー！

ハイアハー！ ハイアハー！ ハイアハー！

ブリュンヒルデ



ブリュンヒルデは舞台袖の岩山の陰に姿を消す。2匹の雄羊の曳く車に乗って谷底からやってきたフリッカは峠にさしかかると急に車を止め、車から降りると、猛烈な勢いで舞台前方のヴォータンへと歩み寄ってくる。

フリッカが近づいてくるのを眺め、独り言で

＜ヴォータン＞ 昔ながらの嵐…相変わらずの頭痛の種！
しかし、今日は何としてでも踏みとどまらねば！

近づくにつれ歩調をゆるめ、威厳をもってヴォータンの前に立つ

＜フリッカ＞ 妻の目から逃れるために山中にこもっておられたようね。
でも、ここで二人きりでお話できるというのは、私にはかえって好都合よ。

＜ヴォータン＞ 何か困り事があるのか？…言ってみて。

＜フリッカ＞ 私はフンディングの窮状を聞きました。
彼は復讐を願っています。
私は結婚の守り神。だから彼の願いを聴き届け、
あの二人を厳罰に処すると約束したのです。
あつかましくも夫を侮辱し、悪辣な行為を働いたあの男女二人を。

＜ヴォータン＞ あの二人？どんな悪いことをした？
彼らが愛し合ったのは春のせいではないか？
彼らは、愛の魔法にとらえられただけなのに、どうして愛の力に責任を取れるというのだ？

＜フリッカ＞ 愚か者の真似をするつもり？ 耳が聴こえない人のつもり？
彼らが神聖な婚姻の誓いをあまりに侮辱したから 私はこんなにも嘆き訴えているのよ。
あなたにはそれがわからないの！？

＜ヴォータン＞ 愛なき者を結ぶ誓いが 神聖なはずがあろうか…
しかも、お前の手に及ばぬことを、私の力で無理やり解決することはどうであろう。
なんといっても、諸力の葛藤の場で戦に訴えることが、私の役目なのだから。

＜フリッカ＞ 結婚の破棄がそんなにいいことだと言うのなら、
もっと誇らしげに、こうおっしゃったらどう？
双子の兄妹が結びつく近親相姦が 神聖なことなのだ、と！
身の毛がよだち、目まいがするわ…
兄が妹を妻として抱くなんて！

いつ見たことがあるというの？ 血のつながった兄妹どうしが愛し合うなんて。

今日、目にしたではないか！と、ヴォータンが相槌をうながす。

官能の歓びもまた、お前の祝福を受ける価値があるのだから、
ジークムントとジークリンデの愛に微笑みかけつつ、彼らの結婚を祝福してやってくれ！

(怒りを爆発させて)

<フリッカ> つまり、野蛮なヴェルズング族を創ったからには、
不死の神々はもうお払い箱ということね？
遠慮のない物言いをしたけれど、凶星じゃなくて？
貴方にとっては、もう聖なる神々の一族はどうでもよく、かつては尊重していたものを放り出し、
自ら結んだ絆をひきちぎり、笑いながら天上界の責務を放棄しているのよ…
そしてその日の気分と欲望にまかせて、あなたが世の中の定めを裏切ってもうけた
あのふしだらな双子の面倒を見ているだけ！
ああ…誰が結婚の誓いを保証できるの？
真っ先に泥を塗ったのはあなただというのに！
今までもずっと、あなたは私という誠実な妻をだまし続けてきました。この世界の低いところも、高いところも、あなたはどん欲にじろじろとのぞき回し、くるくると欲望の対象を変えながら、
私の心を傷つけ、嘲り続けてきました。
あなたが、放埒な愛の産物である身分の低い娘たちと戦場を駆け巡った頃も、
私は悲哀を胸にしながらも我慢しました。
なぜなら、あなたは、あのワルキューレたち…
とりわけ、あなたの望みどおりに動くブリュンヒルデを女主人である私の命令にも従わせていたから
です。 ですが、今回は…
あなたがお気に入りの「ヴェルゼ」という新しい名前で、森をオオカミのようにうろつきまわり、
恥ずべき下劣なことに、身をまかせ、卑俗な人間どもとの間に双子をもうけたとあっては、メスオオ
カミの子供たちの足元に 妻である私を投げ込んだに等しいのよ！
もう勝手にするがいい！我慢も限界だわ！ だましてばかりなら、いっそ私を破滅させて！

神々の庇護を受けなくとも、神の掟を破れる英雄の存在が必要なのだ。

役に立つのは、その男だけだ… と、ヴォータンがのたまう。

<フリッカ> 悪巧みでたぶらかさうというのね？
人間に命を吹き込んだのは誰なの？
愚か者どもの目を開かせたのは誰なの？

あの男の中にいるのは、あなた自身。

(衝撃を受けて)

<ヴォータン> あの男は、激しい苦しみの中で、一人で成長したのだ…
私が守ってやったことは一度もない。

<フリッカ> だとしたら、今日も守ったりしないわね！
あの男に贈った剣を取り上げなさい！

<ヴォータン> 剣！？

<フリッカ> そう…剣よ。
魔力に満ちて輝く剣。
あなたという神から息子に贈られた剣よ。

<ヴォータン> ジークムントは…
(動揺をおさえながら)
危機の中であって、自ら剣を手に入れたのだ。

(ヴォータンの痛いところを突いた印象を得たため、ますます確信を込めて)

<フリッカ>
あなたの力に対しては、私は戦ったけど、ジークムントなどは私にとって奴隷にすぎないわ！
ヴェルズング(ジークムント)から手を引きなさい！
ならば、復讐者(フンディング)があの男と戦うときに、あの男を守らないようにしなさい！

私の目をよく見て、嘘についてはだめよ…
ワルキューレのあの娘にも、手を引かせなさい！

<ヴォータン> ブリュンヒルデは自由だ。

<フリッカ> いいえ、そうじゃない…あの娘はあなたの意思にのみ従っている。
あの娘にも、ジークムントに勝利させることを禁じなさい！

<ヴォータン> ジークムントを殺せるものか…私の剣を見つけたあの子を！

<フリッカ> 魔力を取り去った剣を、ジークムントの目の前で粉碎しなさい！

あの奴隷が、丸腰の状態と敵と出会うように！

(山の頂きの見えないところから)

ハイアハー！ハイアハー！ホヨトホー！

＜フリッカ＞ あのおてんば娘が来たようね…

歓声をあげながらやってくるわ。

ブリュンヒルデが、馬とともに舞台右側の岩道に現れる。フリッカの姿を認めると、彼女はすぐに声を出すのをやめ、次のフリッカの台詞の間に、馬を連れて、静かにゆっくりと岩道を下りる。坂道を下りきると、ブリュンヒルデは馬を洞窟の中に入れる。

ブリュンヒルデ



＜フリッカ＞ 妻である女神の神聖な名誉を 今日こそ盾で守ってください！

人間に嘲笑われ、力を失えば、私たち神々は滅びていくわ…

でも今日こそは私の権利を、この元気な娘が立派に守ってくれるはず。

ヴェルズング(ジークムント)は、私の名誉のために死ぬ…ヴォータンはそう誓ってくれますね？

(おそろしく不機嫌に、内心激怒しながら、岩の上に身体をあずける)

＜ヴォータン＞ 誓う！

第2幕 第2場 ブリュンヒルデ、ヴォータン

ブリュンヒルデは父ヴォータンに、夫婦げんかの顛末を伺うが、ヴォータンは己の不甲斐なさにあきれ、がんじがらめにされたことを嘆く。彼女は、その原因を訊く。

(きわめて小さい声で)

<ヴォータン> 言葉で誰にも言えないことは、永遠に語られぬままでなければならぬ。お前に話しているようだが、これは私自身との会話にすぎない…。

(ブリュンヒルデの目をまっすぐ見つめながら、ぞっとするような押し殺した声色で話す)

愛の快楽を求める若き日々が過ぎ去ったあと、私は、心の底から権力を渴望した。激しい望みと怒りに駆り立てられるようにして、私は、この世界を手中にしたのだ。知らず知らず嘘を多用し、不誠実な行為を行い、災いの種をまくような契約を結んだのだ。あの時期、私を唆したずる賢いローゲは、今はどこかへ逃げてしまった。だが、一方、私は愛を諦めようとは思わなかった。権力の座にありつつも、私は純粹なる愛を求めたのだ。しかし、夜の世界から生まれた臆病なニーベルング族…あのアルペリヒは「権力」と「愛」のつながりを断ち切った。あの男は愛を呪い、その呪いによって、ラインに輝く黄金と無限の権力を手に入れた。彼が作った指輪を私は策略により奪ったが、それをライン河には戻さず、ワルハラ城の支払いにあてたのだ。この城こそ、私が巨人族に建てさせ、全世界に号令を下す城だったのだから。過去に起きた全てのことを知る女神…エルダ、神聖不可侵の知者たるヴァラ(運命の女神)は、私に指輪を捨てるよう忠告するとともに、不死の神々の終末についても警告した。その終末について、私はもっと多くを知りたかったが、あの女人は、それには答えないまま去ったのだ…。その日から、私の心は平静を失い、神としての望みは、より多くを知ることに向けられた。私は世界のふところ深くへと降りていき、愛の魔力でヴァラをつかまえ、知者なるヴァラの誇りを妨げ、私に助言をするよう仕向けたのだ。そのようにして私は彼女から知恵を得たが、あの女人も私から代償を得た…この世でもっとも知恵ある女人は、おまえ…ブリュンヒルデを私に授けてくれたのだ。八人の妹たちとともに、私はおまえを育て、おまえたち「ワルキューレ」によって、私を恐怖に突き落とした運命を変えようとした…不死なる神々のみじめな終末という運命を。そこで、敵への備えを強めるべく、私はおまえたちワルキューレに命じて勇士を連れてこさせた。この勇士たちを、私はこれまで掟の前につなぎとめ、彼らの意欲を削ぎ、腐りきった契約という名の鎧に全面的に服従させていたものだったが、いまや、お前たちワルキューレに命じ、彼らを嵐のような闘争へと唆し、激しい戦争へと駆り立てるようにしたのだ。勇敢な戦士たちの軍勢がワルハラの大広間に集結するようにな！

私たちは、お父様の大広間をいっぱいにうずめ、すでにたくさんの戦士を連れてきました。と、報告するが、ヴォータンの憔悴はひどく、嘆き始める。

<ヴォータン> そうではない・・・ ヴァラの警告の意味をよく考えてみるのだ！
なるほど、その終末は、アルペリヒの軍隊によりもたらされるかもしれない・・・
あのニーベルングは、嫉みと怒りを込めて、私を呪ったのだから。
だが私はアルペリヒの「夜の軍勢」についてはさほど恐れてはいない。
あいつらなどには、私が集めた戦士たちが勝利を収めるだろう。問題は、もしいつか、
アルペリヒが「指輪」を取り戻したとき、ワルハラは終わりではないかということだ・・・
愛を呪ったあの男だけが、嫉みを込めて、指輪の利益を享受し、全ての高貴な者を、
終わりなき恥辱に突き落とすことができるのだ。
そうなれば、あの男は戦士達の心すら変えることができ、勇敢な戦士達さえも戦争へと駆り立て、
彼らの力を得て、私に戦いを挑むであろう。
だから私は、よくよく考えたあと、敵の手から「指輪」を奪おうと思い至ったのだ。
かつて私が呪われた黄金を報酬に与えた巨人族の片割れ・・・
指輪のために兄を殺したファフナーがその指輪を守っている。
したがって、一度は代金として与えた指輪を
あの男から奪わねばならないが、一度契約したことに私は手を触れることができない。
契約の前には、私の気迫とて無力なのだ・・・
これは私を縛るための縛めで、私は契約により支配者となっているので、
その契約の前には、奴隷にすぎないのだ。
だが私には許されないことを、ある者だけは行えるかもしれぬ。その者は、私が決して手助けすること
はなかった勇者で、神とは無縁で、その恩寵を受けず、
無意識のうちに、誰の命令も受けず、己の必要に迫られ、自らの武器を持ち、
私には行えない行為をなすとげるのだ。
決して私の助言を受けての行為ではない。
もちろん私の心はそれだけを願っているにせよ！
神である私に逆らいつつも、私のために戦う勇士・・・
友であり敵・・・そんな勇士を私はどうやって見い出せばよいのだ？
どうやって、私が庇護しない自由な者を生み出せばよいのだ？
自らの反抗によって、私にとって最も親しき友となるべき者を・・・
どうやって、私自身にほかならない別人を作ればよいのだ？
私が望むことだけを自らの意思で行う者を・・・
ああ、神々の危機！おそろしい恥辱！ 未来永劫、吐き気を催すばかりだ・・・
手に触れるものすべては。
なのに、私が望んでいることは、何一つ決して視界に入ってくることはない・・・
なぜなら、自由なる者は自ら生まれ出てこなければならないが、

私がこねくり出す者は、ただの奴隷にすぎないからだ！

ですが、あのヴェルズング族…ジークムントは自ら行動しているではありませんか？ と、娘は父ヴォータンを宥める。

<ヴォータン> 私はあの男と獣のように森をさまよひ、
あの男を神々の意思に反するように促しながら育てた。
ただし、神々の復讐に対しては、あの男を守るものは、ただ一振りの剣しかないのだ。
(ゆっくりと、苦々しく)
神である私が愛のしるしとして与えた剣…。
私はどうしてずる賢くも自分自身を偽ろうとしたのだろうか？
いともあっさり、フリッカはその虚偽を問いただし、
きわめて恥ずかしいことに、私の心を見透かしたのだ！
私は妻の意思に従うしかない。

<ブリュンヒルデ> ジークムントの勝利を撤回すると？

<ヴォータン> 私はアルペリヒの指輪を手に入れ、強欲にあかせて、財宝をも手に入れた！
だが、私が逃れたつもりでいた呪いは、今でも私をとらえて放さぬようだ…
愛するものを見捨てねばならず、愛する男を殺さねばならない。
私を信じる者を、偽りをもって、裏切らねばならないのだ！
(ヴォータンの身振りが表すものは、おそろしいまでの苦痛から、絶望へと変化していく)
消え去るがいい！ 神々しい輝きよ！
神の華麗に彩られた恥辱よ！
崩れ落ちよ！ 私が作ったすべてよ！
私はもはや事を成さず、望むことはただ一つだけ…
終末！
終末だけだ！
(物思いに沈みながら黙り込む)
だが、終末は、アルペリヒにとっても気がかりなこと！
今こそ私は、ヴァラの激しい言葉に隠されていた深い意味がよくわかった。
「暗い心をもつ愛の敵が、怒りにまかせて、息子をつくる時、
幸福な一族(神々)の終末は近いであろう！」
つい最近、私はニーベルング族の噂を聞いた。
それによれば、あの侏儒(アルペリヒ)が、
財宝の力で人間の女の歎心を買ひ、その女をものにした、という。
憎しみの種を、その女は身ごもり、嫉みの力が腹の中でうごめいている。
愛なき者に奇跡が起こったのだ…

その一方で、愛ゆえに結婚をした私、この私のほうは「自由に行動する者」を手に入れられないのだ。(苦々しい怒りにみちて立ち上がる)

私の祝福を受けよ…ニーベルングの子よ！

お前が受け継ぐがいい！私には深い嫌悪感しか催さないものなど。

それは神などという空しい栄光…

お前の嫉みと強欲とで、食い破るがいい！

(衝撃を受けて)

ああ…では、あなたの娘はどうすればいいのですか？ と、ブリュンヒルデがうかがうが。

<ヴォータン> フリッカのために従順に戦い、結婚と誓約とを護れ！

フリッカを選んだ者を、私も選ぶまでだ… 己の意志など、何の役に立とう？

「自由に行動する者」を望むことは、もはや許されない…

だから、お前もフリッカの下僕(フンディング)のために戦うのだ！

<ブリュンヒルデ> なんてこと！お言葉を取り下げてください！

お父様はジークムントを愛しておられるはず。

お父様のため…ええ、お父様のために、私はヴェルズングを守ります。

<ヴォータン> お前の役目は、ジークムントを斃し、フンディングに勝利を得させることだ！

十分警戒し、強く身を処さねばならぬ。

お前のすべての勇気を、戦いに注ぎ込むのだ。

ジークムントは勝利の剣を振るうはずだ… そうやすやすと討ち取れる相手ではない！

<ブリュンヒルデ> 私もその人を愛するようにと、いつも言われていた人…

(きわめてあたたかな声で)

お父様が、心の奥底では、もっとも大事にしている人…

その人と戦えなどという矛盾したお言葉は、いかにお父様であってもお受けできませんわ！

<ヴォータン> 何だと！生意気な！私に逆らう気か？

お前は何さまだ？ 従順に私の意志にしたがい、戦士を選ぶ役目ではないか！

我が事をお前に諮ったからといって、自らの一族からも嘲られるほど、

私は落ちぶれたとでもいうのか？ 私の怒りを知っていよう？

お前の心など、すぐにくじけるぞ！

私の怒りの稲妻が、お前に落ち、お前を粉々にしてしまえば！

この激しい怒りを、今は私は胸の中に閉っておく。
かつては私に笑いかけ、楽しませてくれたこの世界だが、
それすら、恐怖と荒廃の中に落とし込むほどの怒りを…
哀れなるかな！…我が怒りを受ける者よ！
しかし、それに逆らったとて、よけい悲惨なことになるばかりだ！
忠告する…これ以上私をいらだたせるな！
私が命じたとおりにするのだ…
ジークムントは斃れよ…
それがワルキューレたるお前の仕事だ！

衝撃を受けて呆然と長い間立ちすくんでいる。

あんなお父様、頑固一徹のお父様、初めて見たわ…！ かわいそうに…あのヴェルズング！
と、ブリュンヒルデはなげく。

第2幕 第3場

(ジークリンデ、ジークムント)

ブリュンヒルデが峠にたどりつき、谷底をのぞきこんだとき、ジークムントとジークリンデの姿が見える。彼女は近づいてくる二人の姿を一瞬だけ眺めると、愛馬(グラーネ)のいる洞穴の中へ入り、その姿は観客からはまったく見えなくなる。ジークムントとジークリンデが峠に姿を現す。急いで前を駆けていくのはジークリンデ。ジークムントは彼女を引き止めようとしている。

だめだわ！もっと遠くに行かねば！ ひとり愚痴る。

**<ジークムント> もうこれ以上逃げなくてもいいんだ！休もう！かわいいひと！
君は喜びの陶酔から覚めると、急いで外へと駆けて行ってしまい、その狂ったような逃げ足に、ぼくは追いつくのがやっとだった。
森と川を越えて、岩山を乗り越え、一言も口をきかず、君は前へと進んできた。
いくら呼びかけても、君は休もうとしなかった！ 一休みしよう…何か言ってくれ！
黙って心配するのはもうやめよう！
さあ…花嫁を抱いているのは君の兄…
ジークムントが君と一緒にいるんだ！**

(陶酔を募らせつつジークムントの目を見つめると、情熱を込めて彼の首に手を巻きつけ、しばらくはそうしている。だが、激しい衝撃を受けたかのように、急に立ち上がる)

**<ジークリンデ> 行って！行って！けがれた私から離れて！
不浄の手で、あなたを抱いている女から…
この体は、汚され、けがしつくされている…
こんな死体からは離れて！手を放して！嵐よ！消し去って！
そんな値打ちもないくせに、高貴な人に委ねた女の体を！
そのひとが愛しながら抱きしめてくれたとき、それはこれ以上ない歓びでした…
そのひとは、その女を心から愛し、愛を眠りから覚ましたのです。
でも、心と魂をすみずみまで満たすようなその聖なる歓びのゆえに、
今までのおぞましい恥辱の恐怖と戦慄が、辱められた女の心に衝撃を与えたのです。
愛もなく女を抱く男に、一度は従った女の心に！
呪われた女を放して！あなたのもとから去らせて！
私は、尊厳を失い、罪を告げられた身！
清らかな人からは去らねばならない。
あなたみたいな素晴らしい人と結ばれてはならない。
もしそうなったら、私は兄を辱め、結婚のお相手に恥辱をもたらすことになりましょう！**

ジークムントは、フンディングを待って、決闘を覚悟する。
ノートゥングをあの男の心臓に突き刺せば、と叫ぶ。

角笛の音が聞こえ、森からも村からも、つんざくような叫び声。
フンディングが深い眠りから目覚めたんだことがわかる。！
あの男に呼ばれた一族の男たちと猟犬が、けしかけられて吠えている。

どこにいるの？ ジークムントは、どこかにいるのかと心配する。？
死ぬほど愛している、輝かしいお兄さん・・・ とジークリンデは心に叫ぶ。

気を失ってジークムントの腕の中に沈む。
ジークムントはジークリンデの寝息を聞き、彼女が生きていることを確かめて、ほっとする。

第2幕 第4場 (ブリュンヒルデ、ジークムント)

ブリュンヒルデは、馬勒を持って馬を引きながら、洞穴から姿を現し、ゆっくり重々しく舞台前方に向けて進む。いったん立ち止まるとジークムントを遠くから見つめる。またもゆっくり前に進むが、かなり近い距離まで来て立ち止まる。片手に盾と槍を持ち、片手を馬の首にもたせながら、彼女は真剣な面持ちでジークムントを見つめる。

<ブリュンヒルデ> ジークムント！私を見よ！
お前は間もなくこの私にしたがうさだめ。

<ジークムント> いったいどなたなのですか？
かくも美しく荘厳なあなたは・・・。

<ブリュンヒルデ> 死のさだめにある者にしか私は見えない・・・
私の姿を目にする者は、命の火を消すこととなる。戦場でのみ、私は戦士に姿を見せる。
私の姿を見る者は、すでに死すべき運命と定められし者！

(ジークムントは長いこと、じっとまじろぎもせずにブリュンヒルデの目を見つめていたが、やがて思いにふけるように顔をうつむける。だが、ついには悲壮な面持ちで再び彼女を見つめる)

<ジークムント> あなたにしたがう戦士は、どこへ連れてゆかれるのです？

<ブリュンヒルデ> あなたを選んだヴァルファーター(戦いの父)のもとへ、です。
あなたをワルハラへと連れてゆくのです。

<ジークムント> ワルハラの間で会えるのは「戦いの父」ひとりですか？

<ブリュンヒルデ> 死せる勇士の一団が 最敬礼で、あなたを迎えることでしょう。

<ジークムント> ワルハラでは、私の父ヴェルゼとも会えますか？

<ブリュンヒルデ> ヴェルズングであるあなたは、そこでお父上にも会えましょう。

<ジークムント> ワルハラでは、女の人も晴れやかに私を出迎えてくれるでしょうか？

**<ブリュンヒルデ> 望みの乙女たちが、その場を気高く取り仕切っています。
ヴォータンの娘が、あなたに盃を差しあげることでしょう！**

**<ジークムント> あなたの気高いお顔を見れば、
あなたはヴォータンの娘だと、よくわかります。
ですが、不死なるひとよ！一つ教えてください！
私の妹であり妻でもある女性は、兄と一緒にいけるのですか？
ジークムントはそこでもジークリンデをこの腕に抱けるのですか？**

**<ブリュンヒルデ> あなたの妹は、まだこの世の空気を吸うさだめ・・・
ジークムントがジークリンデを目にするにはできません！**

ジークムントはやさしくジークリンデに顔をうつむけ、静かに額に口づけすると、落ち着き払ってもう一度ブリュンヒルデのほうに向き直る。

**<ジークムント> ワルハラとヴォータンによろしくお伝えください。
ヴェルゼや他の勇士たちにも・・・
やさしい望みの乙女たちにも・・・
私は、あなたと一緒にには行きません。**

ワルキューレの焼けつく眼差しを見た以上、ジークムントは、ともに行かねばならないのだ。ジークリンデが喜びと悲しみを生きるところに、ジークムントもとどまりたいと主張する。ワルキューレであるあなたの眼差しが、まだ私を死なせていない以上、私をこの場から連れ去ることはできないはず。

生きている限りは確かにそうでしょうが・・・ と、ブリュンヒルデは告げる。

今日私を打ち倒す勇士が、一体どこにもいないじゃないかと、ジークムントはわらう。
ブリュンヒルデは、どうして「永遠の歓び」には目が向かないの？
この哀れな女(ジークリンデ)が、ジークフリートのすべてだということか？ と嘆く。

ジークムントは言う、あなたは若くて美しいひとかと思っていましたが、冷酷なひとだということが、よくわかりました！ 私の悲しみを見て楽しもうというのなら、ワルキューレよ、私の苦しみを、どうぞお楽しみください・・・ そのどん欲な心で、私の苦難を楽しんでください。
ひからびたワルハラ「歓び」など、もう口には出さないでください！ とブリュンヒルデに答える。

ブリュンヒルデの私にだって、あなたの胸が張り裂けそうな苦悩はよく分かるという。
そして、ジークムントよ・・・あなたの妻を私に委ねなさい・・・
ブリュンヒルデの私がこのひと(ジークリンデ)を大事に守ります！

ブリュンヒルデは馬にまたがると猛烈な速さで舞台右手の谷間の一つに消えていく。ジークムントは身を起こして嬉しそうにその姿を見送る。いつしか舞台は徐々に暗くなってきていた。厚い雷雲が舞台後方に垂れこめ、山腹と谷間と、山の高くなった頂きとを次第にすべて包み込もうとしている。

第2幕 第5場

(ジークムント、ジークリンデ、フンディング、ブリュンヒルデ、ヴォータン)

ブリュンヒルデに、すれ違いになったようだが、どこに隠れているのだ？ 受けて立て・・・ とヴォータンが怒鳴る。

フンディング！ ジークムント！ 出なさい とブリュンヒルデが叫ぶ。

ジークムントは自信満々と、まだ私が丸腰だと思っているのか？ とフンディングを刺激する。
さあ、見ろ・・・お前の家の木の幹から、おそれることなく、私が引き抜いた剣を。

(一瞬、峠は稲妻に明るく照らし出され、フンディングとジークムントの戦いの様子が映し出される)

やめて！ 二人とも！ まず私を殺して！ とジークリンデが泣き叫ぶ

ジークリンデは峠に駆けていくが、突如、舞台右手から戦闘中の二人の頭上に明るい光が輝き、目がくらんだジークリンデは、何も見えなくなってしまうように横ざまに倒れる。光の中にはブリュンヒルデが姿を現し、ジークムントの頭上を飛び回りながら、自らの盾でジークムントを援護する。

<ブリュンヒルデ> 突きなさい！ ジークムント！ 剣の力を信じて！

今にも必殺の一撃をフンディングにくれようとジークムントが剣を構えたとき、舞台左手から燃えるような赤い光が突如雷雲の中に輝き、ヴォータンがそこに姿を見せる。ヴォータンはフンディングの頭上

に立ち、交差させるようにジークムントに向けて自分の槍を伸ばす。

<ヴォータン> 槍の力を恐れよ！ 剣よ！ 砕け散れ！

ブリュンヒルデはヴォータンの登場に驚き、盾を持ちながら後じさりする。ジークムントの剣は、差し出されたヴォータンの槍に当たって粉々に砕け散る。いまや武器を失ったジークムントの胸にフンディングの槍が突き刺さる。ジークムントは絶命して地面に崩れ落ちる。

ジークムントのいまわの吐息を耳にしたジークリンデは、叫び声をあげて、死んだように地面にうずくまる。

舞台は前から後ろまで雲の中の濃い闇に包まれているが、その中にうっすらとブリュンヒルデの姿が見え、彼女が大急ぎでジークリンデのほうへと向かっていることが分かる。



<ブリュンヒルデ> 馬に乗って！あなたを救わねば！

ブリュンヒルデは、谷間に待たせてあった愛馬に、急いでジークリンデを引き上げると、すぐに退場する。するとすぐ舞台中央から雲が晴れていき、死んだジークムントの胸から自分の槍を引き抜こうとするフンディングの姿がはっきりと現れる。ヴォータンは雷雲に包まれたまま、後ろの岩の上に立ち、槍にもたれながら、苦悩に満ちた顔で、ジークムントの遺骸を見つめる。

<ヴォータン> (フンディングに) 去れ！ 下郎よ！ フリッカの前にひざまずけ…

伝えるのだ…ヴォータンの槍は、フリッカを嘲りしものを討ったと。

去るがいい…！ 去れ！

ヴォータンが蔑むように手で合図すると、フンディングは死んで地面に倒れる。
(突然ものすごい憤怒の形相に変わって)

<ヴォータン> それにしても、ブリュンヒルデめ！ 呪われろ！ 掟を破った女！

生意気な奴め！ 怖ろしい罰をくだしてやる！

どんなに逃げようとも、わしの馬がすぐ追いつくぞ！

<ブリュンヒルデ> あんなお父さま、初めて見たわ…！

第3幕

第3幕のあらすじ

♯b ワルキューレの騎行 ♯b (超有名なワーグナーの名曲)

ワルキューレたちが空を駆け巡り、岩山に集まる。(ワルキューレの騎行)



彼女たちがリーダーのブリュンヒルデの集合を待っていると、なんとブリュンヒルデが「人間（ジークリンデ）を乗せた状態で、しかもヴォータンに追われて」やってくる。ブリュンヒルデは事情を話し、妹でたちに助けを求めますが、ワルキューレたちは、ヴォータンに逆らう無謀な彼女を非難。



ジークリンデに子(ジークフリート)が宿っていた

ジークリンデは死を考えるが、体内に新たなジークムントの命が宿っていると、ブリュンヒルデに告げられる。ブリュンヒルデは「この子は、いずれ”剣の破片を継ぎ合わせてできた剣：ノートゥング”をふるう勇士です。」と語り、その子の名を「ジークフリート」と名付けます。名前に度々登場するジーク(Sieg)とは、ドイツ語で「勝利」という意味。

ジークリンデは、それに感激して、心機一転し、生きて子を産むことを決心。

そして、剣ノートゥングの破片を受け取ると、急いで逃げて生きます。

ブリュンヒルデが岩山に眠る

そこに怒り狂ったヴォータンが現れます。

ブリュンヒルデは、「父(ヴォータン)の本心に気付き、命令に従わなかった」と苦渋の苦渋を弁明する。その歌が、次のワルキューレ絶品のアリアである。

♭ War es so schmachlich, was ich verbrach, # ♭

(私の犯したことは、そんなにも恥ずべきことでしたか・・・?)

ヴォータンは心を打たれるが、それでも「罪は受けてもらう」と冷酷に裁断する。

ヴォータンはブリュンヒルデに別れを告げる。

♭ Leb' wohl du kühnes, herrliches Kind! ♭ # =

さらばだ・・・勇敢で立派な我が子よ!

ブリュンヒルデは神性を抜きとられ、岩山の上に眠らされる。

この場面が、オペラ史に残る偉大なラストシーン(「Leb wohl du kühnes herrliches Kind」)。ヴォータンが優しい感情でブリュンヒルデに別れを告げ、音楽が恍惚としたエンディングへと溶け込んでいく。

さらに、岩山は”真の英雄のみが近づけるよう”に炎で呪(まじな)いが掛けられる。

♭ 魔の炎の音楽 ♭

ヴォータンが立ち去り、全幕は終わる。



真の炎の音楽 [wotan magic fire vpo walkure - 検索 画像](#)

楽劇 ワルキューレ 対訳 3/3

<https://w.atwiki.jp/oper/pages/91.html>

岩山の頂。モミの木の森が舞台右手を区切っている。左手には洞窟への入口があるが、この洞窟は天然の大広間となっており、その上が岩山の頂上となっている。舞台後方は視界が完全に開け、大小さまざまな岩石が斜面の壁となってそびえる。そのさらに後方は、見えないながらも急な絶壁となっているようである。ちぎれ雲が嵐に飛ばされるように激しく、岩山のへりを通り過ぎていく。

第3幕

前奏曲と第1場

雲の中で稲妻がぱっとひらめくと、戦死者を鞍にくくりつけた騎乗のワルキューレ8人が現れる。

それらワルキューレの名は次のとおり。こちらに近づくと、岩山のへりを左から右へと舐めるように通り過ぎる

ゲルヒルデ、オルトリンデ、ヴァルトラウテ、シュヴェルトライテ、
ヘルムヴィーゲ、ジークルーネ、グリムゲルデ、ロスヴァイセ

ゲルヒルデ、オルトリンデ、ヴァルトラウテ、シュヴェルトライテの4人は、岩山の頂きにある洞窟の脇やその上に陣取り、鎧兜に身を包んでいる。

前奏曲: 楽劇『ワルキューレ』を代表する名曲



[ワーグナー 『ワルキューレの騎行』 Wagner "Ride of the Valkyries" - YouTube](#)

稲妻光る雷雲が左からたなびき、その中に騎乗のグリムゲルデとロスヴァイセの姿が現れる。二人の鞍にはそれぞれ一人ずつ戦死者が繋がれている。ヘルムヴィーゲ、オルトリンデ、ジークルーネは森から出て、岩山のへりから二人に手を振る。

まだ8人よ。ひとりだけ足りない。

ブリュンヒルデは、きっとまだ、あの褐色のヴェルズングのところにいるのね。

お姉さまが 馬から降りるのを手伝わないと！

(ゲルヒルデとヘルムヴィーゲは全速力で森に駆けていく。ジークルーネとロスヴァイセもそれに続く)

ブリュンヒルデが「私をまもって！この窮地から救って！私、お父さまに追われているのよ！」と叫ぶ。すると、ワルキューレの一人が、目ざとく、お父さまが神馬で駆けてくる！と注進する。

〈ブリュンヒルデ〉

怒り狂う狩人が、私を追って、
北から近づく！…近づく！ みんな、私を守って！そして、この女性も！

この人は、ジークムントの妹であり妻であるジークリンデ。
ヴォータンは、このヴェルズング族の兄妹を呪い、
私に、ジークムントの勝利を取り下げるよう命じられた。
でも、私はジークムントを盾で守ったわ… 神に逆らって！
神は自らの槍で介入し、ジークムントは死んでしまった。
でも、私は、この女の人を助けるため、あなたたちのところにやってきた…
ねえ！ この不安におびえる私を、罰の一撃から守ってちょうだい！

ワルキューレたちは、ヴォータンはヴェルズング族を皆殺しにしようとしている！
一番身軽な馬を貸して？ 早く！この人ジークリンデを逃がすために！ と一斉に叫ぶ。

ブリュンヒルデも。必死に、馬を貸して！
どうか、この可哀想な女の人を救ってあげて！

ジークリンデはこの間ずっと凍ったように虚ろな目をしていたが、ブリュンヒルデが彼女を守るように強く抱きしめた途端に、突き放すような身振りで体を起こす

〈ジークリンデ〉 もう私にかまわないで…

あたしなんか死んだほうがいいのかよ！
どうしてあなたは、私を敵から守って逃げたりしたの？
あの戦場の嵐の中で、私はいつそのこと
ジークムントが受けたのと同じ剣をこの身に受けたかった…そうすれば、
あの人と一緒に死ねたでしょうに！
もうジークムントはいない…ジークムント…あなたは！
ああ！私の望みどおりにして！死なせて！
私を逃がしたことをあなたに恨むことはできないけれど、
どうか私の願いを聞きいれて…
あなたの剣を私の胸に突き刺して！

＜ブリュンヒルデ＞

生きて！生きるのよ！愛のために！
ジークムントの愛の証しを救うのよ…
あなたの体の中には、もうひとりヴェルズングがいるのよ！

＜ジークリンデ＞

（はじめは驚いていたのが、いきなり、輝かしい歓びが顔から溢れる。）

私を生かしてください！この子を助けてください！
ワルキューレの乙女たちも！どうか…どうか私の身を守ってください！

ヴォータンが凄いい形相で この岩山に向かってくる。

＜ブリュンヒルデ＞

（ジークリンデに手で方角を指し示しながら）

さあ急いで！東へ行くのよ！
歯を食いしばって耐えるのよ…どんな苦しみにも…
どんな飢えや乾きにも…どんな茨や岩場にあっても…
笑うのよ！どんな逆境や苦しみにあっても、笑うの！
でも、今から私が言うことだけは思い出して、それを心の支えにして！「この世で最もすぐれた男の子が あなたの身には宿っています…！」

（ブリュンヒルデは、ジークムントの剣の破片を鎧の中から取り出すと、その厚い破片をジークリンデの手にゆだねる）

その子のために、この剣の破片を大切に持っていて！
その子の父の斃れた地から、私が何とか拾い集めた破片を…いつかきっとその子は、この剣を鍛え直して振り回すはず。
その子の名前は私から授けましょう…
ジークフリート…勝利をことほぐ者…と！

＜ジークリンデ＞

（心の底から感動して）

ああ…なんて神聖な奇蹟！なんて素敵な女性！
あなたの誠実さに、私はほんとうに慰められ、救われました！
私たちが愛したあの人のためにも、私は可愛いこの子を守ります…いつか必ず、私の感謝の気持ちが、あなたに微笑みますように！さようなら！ジークリンデの悲しみをあなたの力に変えてください！

(ジークリンデは舞台の前方を右手へ走り去っていく。その時すでに岩山の頂きは黒い雷雲におおわれている。嵐の吹きすさぶ猛烈な音が舞台後方から聞こえてきて、舞台右手では炎がますます赤々と照り返す)

〈ヴォータンの声〉 逃げる気か！？ブリュンヒルデ！

(ブリュンヒルデはしばらくジークリンデを見送っていたが、舞台後方に向きを変えてモミの森を見つめた途端、再び恐怖にとらえられたような仕草を見せる)

ブリュンヒルデが、 ああ！みんな助けて！心が折れてしまいそう！ と嘆く。

第2場 (ワルキューレ全員とヴォータン)



[ワグナー《ワルキューレ》 | 演目紹介 | MET ライブビューイング：オペラ | 松竹 \(shochiku.co.jp\)](#)

ヴォータンは、憤怒の形相で興奮して森から姿を現す。ブリュンヒルデの姿を求めつつ、凄まじい勢いで岩山の頂きにいるワルキューレの群れのもとにやってくる。

〈ヴォータン〉

ブリュンヒルデはどこだ？掟を破った女は？

お前らは、あの悪人をかくまおうというのか？

馬鹿にするな！生意気な口を叩くな！

お前らがブリュンヒルデをかくまっていることなどお見通しだ。

8人のワルキューレたちは、お姉さまは、あたしたちの庇護を求めてきたのです とかばう。

〈ヴォータン〉

軟弱な女たちめ！

そんな弱い心を私から受け継いだのか？

私は、お前たちを、戦場に耐えうるような強く厳しい心の持ち主に育てたはずなのに、たかが不実な女ひとりを罰するからと言って、そんなに泣きわめいたりするのか？

知っているのか？泣き虫ども。

臆病なお前たちが泣いてかばっているこの女のしたことを…。

私の心に秘めた想いを、この子ほど知っている者はいなかった。

私の本当の意志をこの子以上に知る者はなかった！

ましてや、私がこの世に望みをつないだ理由も、この子がいたからこそだったのだ…

それなのに、この子は幸福な絆を断ち切り、不実にも私の意志に逆らい、

私の命令を公然と嘲笑い、私に武器を向けたのだ！

この子の幸せを願って、私が作った武器を…！

聴こえるか？ブリュンヒルデ！

お前に鎧を、兜と武器を、喜びと慈愛を、名前と身体とを与えたのは、この私ではなかったか？

そんな私の嘆きの声を聴きながら、お前はおびえて身を隠し、

卑怯千万にも罰をまぬがれようというのか？

ワルキューレの一団の中から歩み出ると、控えめではあるがしっかりした足取りで、山頂をくだり、ヴォータンのすぐ前に進み出る。

〈ブリュンヒルデ〉 お父さま…私はここにいます。罰を下してください！

〈ヴォータン〉 私が罰するのではない…

お前自身がお前を罰すればよい。

お前は私の「意志」によってのみ存在していたはずなのに、私に逆らう意志を持ったではないか。

私の「命令」を果たす立場だったのに、私に逆らう命令を出したではないか。

お前は「望みの乙女」だったはずなのに、私に逆らう望みを抱いたではないか。

私の「盾」となる女だったはずなのに、その私に盾ついたではないか。

私の意にそって「運命を決める」女だったはずなのに、私に逆らって運命を決めたではないか。

勇士の「心を動かす」立場だったのに、私に逆らうよう勇士を動かしたではないか。
かつては、お前のあり方は、ヴォータンが決めていた。
だが、これからのお前のあり方は、お前自身が決めればよい！
もはやお前は「望みの乙女」ではない。
かつてはワルキューレだったかも知れないが、これからは、どのようにでもなればよい！

<ブリュンヒルデ> 私を追放するの？本気でそんなことを？

第3場 (ヴォータン、ブリュンヒルデ)

(ヴォータンと、彼の足元にじっと横たわっていたブリュンヒルデだけが舞台に取り残される。長く重たい沈黙が続く。変わらぬ姿勢のまま)

これまでの推移(別当勉の解釈)

ヴォータンの怒り

フリッカは絶対に近親相姦を許さない。あの兄妹を殺せと指示を受けた。
フンディングを支援しないでジークムントに味方したから、
ブリュンヒルデは裏切り者 = 命令違反

ブリュンヒルデの忖度と行動

父上は、フリッカの訓示により、最初の命令を翻した。
父上へのフリッカの指示は、どうも納得できない。
ジークムントとジークリンデの近親相姦も、それほど問題か？
ジークムントは英雄に育った。ジークリンデが惚れるのも理解できる。
もともとの父上の構想は、正しい。だから、残されたジークリンデを助けた。
深層心理：ブリュンヒルデはジークムントの美丈夫さに瞠目して惹きつけられた。
ジークリンデが惚れた以上に、惚れた。恋敵になっても。
ゆえに、ジークムントの忘れ形見の子を助けなければ。
父上に殺されてもいい。
惚れた男に尽くすのは、女の仁義だ。

本楽劇における絶品アリア：

Act 3- War Es So Schmäählich, Was Ich Verbrach

私の犯したことは、そんなにも恥ずべきことでしたか・・・？

(ゆっくりとだが少しずつ頭をもたげ始める。初めはおずおずとしていたが、やがて声を高めて)

＜ブリュンヒルデ＞ 私の犯したことは、そんなにも恥ずべきことでしたか…？

そんなに恥ずかしい罰を下されるほど。

私のしたことは、そんなにも不品行なことでしたか…？

そんなに深く私の品位を傷つけるほど。

私は、そんなにも不名誉なことをしたというのですか…？

名誉を勝手に奪い去られてしまうほど。

(次第に身を起こし、ひざまずいて)

教えて！お父さま！私の目をよく見て…

どうか怒らないで、私に教えてください。

どんないかがわしい罪を私が犯したと言うの！

お父さまが、ご自身の意に逆らってまでも、

大切な我が子を追放せざるを得ないほどの！

＜ヴォータン＞ お前のしたことをよく考えてみる。そうすれば、その罪が分かるはずだ！

＜ブリュンヒルデ＞ 私はお父さまの命令を果たしただけです。

＜ヴォータン＞ お前に命じたか？ヴェルズングの側に立って戦えなどと…

＜ブリュンヒルデ＞ 戦場を司る神として、お父さまはそうお命じになりました！

＜ヴォータン＞ だが、その指示は撤回したではないか！

＜ブリュンヒルデ＞ フリッカがお父さまの本来の意志を歪めたからです…

フリッカの考えに従ったとき、

お父さまは、あなたご自身の敵となったのです。

ヴォータンは、お前はこの私を…愚かで卑怯な男とみなしたのだ！ と反問する。

お父さまがヴェルズングのジークムントを愛していたこと、を知っていたと、ブリュンヒルデがのたまう。

それで、あの男を守ろうとしたのか？ とヴォータンは合点する。

＜ブリュンヒルデ＞ 私がそうした理由は、

「それ」を見たからです。

お父さまは、別のこととの板挟みになって、「それ」に仕方なく目を背けざるを得なかったけれど！

いつも戦場でヴォータンの背中を追いかけていた娘は、
今初めて、お父さまが見なかったものを見たのです…
あの「ジークムント」を、私はこの目にしたのです。
私は、彼に死を宣告するために歩み出て、その瞳を見つめ、声を聴きました。
心の底からの苦難の声を聴き、比類なき勇者の嘆きを耳にしたのです。
ああ…最も自由な恋愛が直面した恐ろしい苦悩…
最も悲痛な心情が企てた力強い反抗！
そのとき、耳に残り、目に焼き付いたもの…
それは深く心に突き刺さり、存在の底の底から、私を揺さぶったのです。
恥ずかしさのあまり呆然として、私は立ち尽くしました。
この人の役に立とうとしか考えられなかったのです…
勝利でも死でも、ジークムントと分かち合おう…
私が選び取るべき道はそれしかありませんでした！
この愛を…私の心に注ぎ込んだもの…
私をヴェルズングと共に戦わせたもの…それはお父さまご自身の想い。
その想いを胸に抱きしめ、私はお父さまの命令に逆らったのです。

本楽劇における絶品アリア 2 : Act 3- Der Augen Leuchtendes Paar

<ヴォータン> そうか…お前は私が望んで果たせなかったことをしたわけだな…
苦しみに引き裂かれる私にはできなかったことを。
だが、心の歓びをそんなに簡単に手に入れられるとでも思ったのか？
私はどうなる？…心を悲しみに焼き尽くされた私は…
つらい苦しみが打ち続くあまり、憎悪ばかりが膨れ上がって、苦しみ病める心で
世界が「愛」へと向かうことを妨げている私は…。
自分自身の現実の姿に死ぬほどあらいつつ、気が狂いそうな苦痛のために、
激昂して立ち上がり、
狂わんばかりの憧れに浸りながら、この世界を木っ端微塵にすることによって、
永遠に続く悲哀を終わらせようという恐ろしい願いをもてあそぶ私は…。
そんな私を横目に見つつ、お前は甘い歓びに浸るのか…。
歓びの到来に陶醉するあまり、お前は笑って愛の薬を飲むというのか…？
私の身を神々の危機がむしばむこの時に。
お前はそんな軽薄な女だったのか…ならば勝手にやればよい…
私との絆はもう断たれたのだから。
もうお前と一緒にいることはできない。
お前と二人で色々な思いをめぐらすことも、もうできない。
これからは離れ離れになったまま、何一つ共にはできないのだ…

この生が続く限り、この空が続く限り、お前と私とが、再び出会うことはないのだ！

〈ブリュンヒルデ〉 ほんとに、こんな愚かな娘は何のお役にも立てませんでした…
お父さまに何を教わっても ただ驚くだけで、まるで学び取れなかったのですから。
でも、私が学んだことが、たった一つだけあります。
それは「愛すること」です…あなたが愛したものを…。
私は追放され、もうお会いすることはできませんが、
お父さまのほうも、今まで体の一部だったものを捨て去り、
遠くに半身を置きざりにするようなものなのですよ。
かつてはお父さまの一部分だった私という存在を…
お父さま！神よ！ それだけは忘れないで！
お父さまの永遠の半身である私を辱めないで！
お父さまご自身の屈辱を望まないで！
恥辱に沈む私を見れば、お父さまの身も辱めることになるのですから！

私がワルハラを離れ、もうお父さまとは行動を共にできないように、私を手に入れる男が、無価値な男で
ないようにしてください。と哀願する。

(小声で、内緒ごとを相談するかのように)

お父さまは高貴な一族を創り出しました。そこから弱い男が生まれるはずはありません。
あのヴェルズング族から生まれてくるのです。ジークリンデのお腹の中には清らかな赤ん坊がいます。
と、ジークムントのために作った剣も彼女が持っているとも、ブリュンヒルデは吐露する。

だが、ヴォータンは、ヴェルズング族からも縁を切ったのだ… と言い切るが。
あの女の庇護を私に求めようとでも言うのか！？ と疑う。

私はその剣を砕いたではないか！ お前は、なぜ私の意志をくじこうとする…！
お前を深い眠りに封じ込める…。 ついにヴォータンは結論を言い渡す。
それに対して、ブリュンヒルデは、深い眠りに閉じ込められ、眠る女を護ってください！
そうすれば、恐れを知らない自由な勇者だけが。
望みが過ぎるぞ！ そんなに甘やかさない、とヴォータンは断じる。

(ヴォータンの足にすがりついて)

どうしてもお聞き届けください。と哀願するブリュンヒルデ。
私…お父さまにすがりつくこの私を打ち殺し、
恥辱だけは…ひどすぎる辱しめだけは私に与えないで！

＜ブリュンヒルデ＞ お父さまの命令で炎を燃やし、燃え上がる火焰で岩山を取り巻いて！
ゆらめく炎で岩山を焦がして！
そうすれば、弱い男が私に近づいてきても、その炎が飲み込んでくれるわ！



<https://www.bing.com/images/search?view=detailV2&ccid=>

(ヴォータンはブリュンヒルデの激しい願いに圧倒され、深く心を揺り動かされ、感情を取り戻して彼女のほうへ振り向く。)

＜ヴォータン＞ さらばだ…勇敢で立派な我が子よ！

我が心の清らかな誇りよ！

さらば…さらば…さらば！

(愛情をあふれさせて)

別れねばならない。

お前と、愛を込めて目配せを交わすことはもうできない。

並んで馬を走らせることもできないし、酒宴(うたげ)の酒を注いでもらうこともない。

愛するお前を失ってしまう…

我が眼の癒しそのものの、お前の笑顔を…

花嫁を守る炎よ！燃え盛れ！

乙女を求めるとんな若者も見ることがないほどに！

岩山を取り巻け…

焼き尽くし、燃やし尽くして、弱い者が近づけないようにするのだ…！

弱き者は、ブリュンヒルデの岩山に近づいてはならない！

なぜなら、この花嫁を手に入れる者は、神である私より、もっと「自由」でなくてはならないからだ！

ブリュンヒルデは感極まってヴォータンの胸に顔を沈め、父と娘はずっと抱きしめ合ったまままでい

る。やがてブリュンヒルデは顔を起こし、なおもヴォータンを抱きしめながら、荘厳なまでの感動を込めてヴォータンの瞳を見つめる。

このきらめく両眼…

何度も、にこりと私に微笑んだ…

戦場でのお前の勇気を称えて、私が口づけしたとき…

ろれつの回らぬ舌で、可愛く唇をふるわせながら、勇者を讃える歌をお前が歌ったとき…

このかがやく両眼で、なんども戦場でまばたきし、希望の憧れを心に燃やし、

不安に揺れる私の想いを、現世の歎びへの願いに変えてくれたとき。

それも今日が最後なのか…。

お前の想いを伝えてくれ…

最期の別れの、この口づけで！

お前を手に入れる男には幸せの星がまたたくだろうが、不幸せで、不死な私には

別れの結末があるだけだ。お前から神は去っていく…

私の口づけが、お前から神性を奪うとき！

ヴォータンは長い間、ブリュンヒルデの目に口づけする。ブリュンヒルデは目を閉じ、静かに体の力を抜きながら、ヴォータンの腕の中で仰向けに倒れていく。モミの木の太い枝が空を遮る苔むす丘の上に、ヴォータンはブリュンヒルデを横たえる。

ローゲ！よく聴け！

はじめ私はお前を、燃え盛る「ほむら」(ローゲ)として見出だしたな！しかし、

ヴォータンは次の台詞とともに、岩の頂きを槍で三度突く。

ローゲ！ローゲよ！来たれ！

その岩からは火が溢れだし、次第に明るさを増す炎となって膨れ上がる。突如、炎が勢いよく天を突いて赤々と揺らめく。その火焰は、炎はすぐに舞台後方へと遠ざかっていき、山裾を取り巻いて燃え続ける

我が槍の穂先を怖れる者よ！ 絶対に…この火を越えてはならないぞ！

ヴォータンは、禁令を発するかのように槍を伸ばすが、やがて苦悩に満ちて振り返り、ブリュンヒルデの姿を見つめる。ヴォータンの姿は次第に炎に隠れて見えなくなっていく。

幕が下りる。

エピローグ

この『ワルキューレ』の後に続くのは、『ジークフリート』である。主人公は、近親相姦で生まれたヴォータンの孫王子ジークフリートであるが、伝家の宝刀ノートゥングを除けば、何のしがらみもなく、育ってしまう。源氏の義経もそうだったが、凶らずも親の仇だけ知恵付けられ稀に見る源家の武将に育ってしまう。いずれも、深謀・戦略知らずの英雄であった。であるから、仇討にかまけて世の統治とか平和の追求なぞ視野になく、ましておや、世界を操れる《指輪》さえも興味すらなく大人になって、時代の行く末も予感できずに塵芥の如く消されて行く。そんな話は、掃いて捨てるほどあるが、ただ、そうになっていく経緯と物語が如何様にも千変万化する。ということで、語り部に締めくくられて、普通は終わるのである。

ところが、ワーグナーの作品はそうは簡単にいかない。ストーリーをダイナミックに盛り上げて、場の雰囲気揺蕩わせる鮮やかなオーケストレーションと一流の歌手たちによる歌唱が私たちに息をつかせない。これが、オペラの麻薬となって私たちに魅了するのだ。

一方、物語をミクロにみれば、ワーグナーは見事に男女のロマンスにまとりつく悲劇を埋め込んだ。しかも、その中に天上界の揉め事をからませ、私が抱いてきたロマン美の頂点の一つともなる『女の仁義』を見事に描きこむ。それを『ワルキューレ』といわれる女剣士ブリュンヒルデに演じさせた。私は胸が震えた。トラヴィアータ、トスカに続いて、こんどはワルキューレが誰も手が付けられないほどの命懸けの仁義を果たすドラマを観せてくれるのである。

そのような人情的な脂っぼい激情、神々的な透き通ったドラマを堪能しながらも、その情感を支える絢爛豪華な音楽に茹でられてしまうのだ。つまり、臨場感豊かなソノリティを聴かせてくれるステレオという近代の音響技術が私たちの感覚を麻痺させ、『トリスタンとイゾルデ』の無限旋律のなかに染み込んだ麻薬に中毒した患者の如くワーグナー魔術の虜になること疑いなし。信じられないと思う方々には、是非とも『ローエングリン』前奏曲の悠久のクレッシェンドを聴いていただきたい。何故、ブルックナーがワーグナー音楽に魅入られたか明白となろう。あの悠大なクレッシェンドの極致ともいえるブル7第2楽章の由来に納得する。

でも、それはベートーヴェンの第九の第3楽章“アダージョ・モルト・エ・カンタービレ”に原点があると一瞬で解せる、ことのほうが重要である。天才の芸術は、繋がっているのだ。

さて、これから、どこに巡礼するか私は迷っているが。

今は、毎度ながら、巡礼の後遺症に浸っていたい。

敬具

別当 勉

<betobetoven@mail2.accsnet.ne.jp>

参考文献等

- (1) バイロイトの魔術師:**ワーグナー** バリー・ミントン著(2012年)
和泉香(訳)、三宅幸夫(監訳) [悠書館]
- (2) ヴァーグナーの生涯 http://pietro.music.coocan.jp/storia/wagner_vita.html
- (3) 楽劇『ワルキューレ』対訳 <https://w.atwiki.jp/oper/pages/91.html>
- (4) 楽劇《ニーベルングの指輪》全曲; 14CD
指揮: ヘルベルト・フォン・カラヤン; ベルリンフィルハーモニー管弦楽団、
ベルリン・ドイツ・オペラ合唱団 (1966~1970年録音)
 - ・楽劇「ラインの黄金」[457 781-2]
 - ・楽劇「ワルキューレ」[457 785-2]
 - Youtube: ワルキューレの騎行 <https://www.youtube.com/watch?v=ZOTdlhaGEuw>
 - Youtube: 全曲 : Adam Fischer, Vienna State Opera, 2016.
<https://www.youtube.com/watch?v=NMTc4t6RHmw>
 - ・楽劇「ジークフリート」[457-790-2]
 - ・楽劇「神々の黄昏」[457 795-2]

一般教養講座の歩み

2024年12月11日 別当 勉

<実施期日>

この広い宇宙いっぱい I	『ギリシャ時代から』	2016年10月15日
この広い宇宙いっぱい II	『恒星』	2016年11月20日
この広い宇宙いっぱい III	『超新星』	2017年 1月21日
この広い宇宙いっぱい IV	『銀河』	2017年 3月24日
この広い宇宙いっぱい V	『ビッグバン』	2017年 6月24日
この広い宇宙いっぱい VI	『アインシュタイン』	2017年 8月 6日
第1回	クラシック巡礼「ルードヴィッヒの夢」	2018年 2月24日
第2回	クラシック巡礼「バッハの祈り」	2018年 4月21日
第3回	クラシック巡礼「ショパンの嬰ハ短調」	2018年 7月21日
第4回	クラシック巡礼「モーツァルトの旅」	2018年10月20日
第5回	クラシック巡礼「シューベルトの風」	2019年 2月24日
第6回	クラシック巡礼「シューマンの恋」	2019年 4月20日
第7回	クラシック巡礼「ブラームスの彷徨」	2019年 7月20日
	◎クラシック巡礼なんでもサロン『ファンタジア』	2019年 8月28日
第8回	クラシック巡礼「チャイコフスキーの森」	2019年10月19日
	◎クラシック巡礼なんでもサロン『展覧会の絵』	2019年12月 4日
第9回	クラシック巡礼「ベルリオーズの劇場」	2020年 2月22日
第10回	クラシック巡礼「リストの軌跡」	2020年 7月12日
	◆クラシック巡礼 道草「母の祈り」	2021年11月 6日
第11回	クラシック巡礼「ヴェルディの椿姫」	2022年 7月24日
第11回再演	クラシック巡礼「ヴェルディの椿姫」	2022年11月15日
第12回	クラシック巡礼「プッチーニのトスカ」	2023年 4月23日
	◆クラシック巡礼 道草「ファンタジア」	2023年11月13日
第13回	クラシック巡礼「ワーグナーとワルキューレ」	2024年11月30日

開演予定は一ヶ月ほど前に、つくば市民交流センターにポスター掲示します。

講座テキストは次の URL サイトに事後掲載。

<http://www.i-s-m-kk.co.jp/>

「株式会社情報システム管理」のKW検索でも可能。